みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ウラル語族における等位表現の類型

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004455

ウラル語族における等位表現の類型

庄　司　博　史*

Typology of Coordination in the Uralic Languages

Hiroshi SHOJI

It is widely known that coordinate conjunctions in the Uralic languages are of comparatively late origin. But it should not be assumed that there was no device to express coordinative relationships between nouns, other than straightforward juxtaposition. On the contrary, there existed various ways to compensate for the lack of coordinate conjunctions. And many scholars have hitherto turned their attention to the phenomena of the Uralic coordination, which might have appeared curious compared with those of modern Indo-European languages.

It was not until Ravila's work (1941) that an attempt was made to examine Uralic coordination on a broad scale. Ravila explained the coordination of nouns, in which each juxtaposed noun contains an identical element(s), in connection with the basic principle of the Uralic word order, i.e., the modifier always precedes the modified. According to Ravila, identical elements, such as dual and plural indicators, or case and possessive suffixes, may function only to signal that the nouns containing them belong to the same grammatical category. But he gave no satisfactory answer to the question of why the very curious dual and plural suffixes may be attached, even when each noun indicates a singular object. Ravila explains that the numerus suffixes of nouns have developed in concordance with the numerus conjugations of verbs, and that these suffixes later began to signal coordination when repeated in each noun. However, this hypothesis offers a somewhat conceptual impression without supporting evidence. Moreover, the earlier studies of Uralic coordination, including that of Ravila, could not deal with coordination in general but could only pose arbitrary examples,

* 国立民族学博物館第3研究部

because their notion of coordination was apparently too abstract.

In this paper, I adopt the generally accepted theory of transformational grammar for the definition of coordination: i.e., there are two types of coordination in the deep structure of a sentence, namely, sentence conjunction and phrasal conjunction, each having different characteristics, although they might optionally take the same surface form. Using this framework, I attempt to account for the pecuarlities of all possible coordination types in the Uralic languages. I have classified Uralic coordination into the following 8 types:—

1. Juxtaposition of nouns, each having an identical element(s);
2. Juxtaposition of nouns without any identical elements;
3. Coordination based on a numerus indicator;
4. Coordination based on a comitative (instrumental) indicator;
5. Coordination based on a *nomen possessoris* derivational suffix;
6. Coordination based on an enclitic particle of emphathy or augmentation;
7. Coordination by an independent coordinate conjunction derived from a native morpheme stock; and
8. Coordination by a coordinate conjunction of foreign origin.

After examining these cases, I reached the following conclusions. Devices for phrasal coordination developed earlier than those for sentence coordination, because the latter could have as well been expressed by a simple juxtaposition of sentences. Type 1 occurs widely among the Uralic languages, when compared to Type 2. This may support Ravila's hypothesis that there needed to be some device to indicate nouns belonging to the same grammatical category, when they were juxtaposed. In this sense the parallel affixation of identical elements has developed as a productive way of coordination. Type 3, 4 and 5 appear to have derived from the peripherical use of their original functions due to the connotation of simultaneousness or accompaniment. Type 3 was used when things expressed by coordinated nouns were regarded as forming a semantic whole. On the other hand Types 6 and 7 have idiosyncracy of sentence coordination. I assume that sentence coordination in the deep structure was reduced to a simple sentence first by means of an enclitic or independent particle which could function as an adverb of augmentation or addition. Present-day Uralic languages seem to have a tendency to develop proper coordinate conjunctions, which can be equally used for both types of coordination, and which, therefore may correspond to the coordinate conjunctions

of the well known modern Indo-European languages, from their own stock side-by-side with those of foreign origin. It should be observed, however, that they still retain a shade of their original characteristics in usage and meaning.

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 等位接続について
Ⅲ. ウラル語族と等位表現の分類
1. ウラル語族
2. ウラル系諸語の等位表現の分類
Ⅳ. ウラル語族の等位表現
1. 同一形態素をもつ名詞の並置
2. 同一形態素をもたぬ名詞の並置
3. 数標示素を用いるタイプ
4. 従格（具格）を用いるタイプ
5. 具備形容詞派生接辞を用いるタイプ
6. 附加・強意の後接辞を用いるタイプ
7. 自律小辞的等位詞を用いるタイプ
8. 借用語に起源をもつ等位詞を用いるタイプ
Ⅴ. 結　論

Ⅰ. はじめに

a boy *and* a girl

ここに用いられたような *and* を英文法では，等位接続詞 (coordinate conjunction =coordinator) あるいは詳しくは連結等位接続詞 (copulative conjunction) という。

この *and* の担っている役割に，ウラル系諸語でほぼ相当するのが次のような表現である。

フィン（フィンランド）語：kissa *ja* koira
猫　犬

(*ja*: ゲルマン語から借用の等位詞)

「猫と犬」

カレリア語：löttö čiiliŋ-*ke*
かえる　はりねずみ

(-*ke*: 従格「～と一緒に」の接辞)

「かえるとはりねずみ」

リーヴ語：kùona tsī'lə-*ks*
かえる　はりねずみ

(-*ks*: 変格「～に」の接辞)

「かえるとはりねずみ」

モルドヴィン語：at'*a*-*t* baba-*t*
男　女

(-*t*: 複数の接辞)

「男と女」（但し必ずしも両者が複数であるとは限らない。）

チェレミシ語：aka-*k* šužar-*ak*
姉　妹

(-(*a*)*k*:「～も」を表す後接辞)

「姉，そして妹も」>「姉と妹」

ジリエーン語：lun-*a* voj
昼　夜

(-*a*:「～のある」を表す形容詞派生接辞)

「昼のある夜」>「夜と昼」

ヴォチャーク語：ataj-*en* anaj
父　母

(-*en*: 従格語尾)

「父と母」

オスチャーク語：imə-*ŋən* ike-*ŋən*
女　男

(-*ŋən*: 双数の接辞)

「女と男」（1人づつ）

このように多くの等位表現法があり，そのほとんどは元来それぞれの言語で別の役割を担っている要素で，英語の例に見られたような等位詞とは異なったものである。ウラル系言語それぞれには，これらの方法がいくつか並存している場合があり，さらにそれらの用法や意味が異なっているため，等位表現は全体として複雑な体系を成しているといえる。

この論文の目的は，ウラル系諸語で用いられている等位表現（主に語に関して）をいくつかのタイプに分類し，各言語の用例を分析することにより，それぞれの特徴を明確にし，それら諸タイプ間の相互関連を明らかにすることにある。さらにその過程で通時的な観点から他の言語事象と等位表現法との関連をさぐり，ウラル語自体のもつ特性解明の一端としたい。

Ⅱ．等位接続について

最初に，本論文における基本概念である連結等位接続について明確にしておきたい。そのために，英語を例にとって，伝統文法と変形文法において，これがいかに扱われてきたかを概観することにする。

一般に印欧語の伝統文法では，接続詞とは，「文，節，句，語を互いに関連づける特殊な機能をもつ小辞」[Webster's New International Dictionary 1960] とされ

る。そして接続詞は更に，等位接続詞と従位接続詞に分類される[1]。そのうち前者は，同じ範疇または機能の二つの要素を関連づけるものとされ，英語では，*and, or, but* があげられる。*and* は，二要素を等位的に結びつけるという意味から，更に，連結等位接続詞 (copulative conjunction) と呼ばれ，他の二者から区別される。本稿では，この *and* に相当する表現法のみを対象とする[2]。

等位接続詞は，従属接続詞とは異なり文間と同様に語間においても用いられ，等位関係にある語は双方とも，統辞的に同じ範疇であることを標示する文法的形態をとる[3]。つまり，文間，語間に現われることのできる *and* は，前後の要素に決った形態（名詞の場合なら格など）を要求しない，双方の要素から等距離にある純粋に等位機能のみを有する小辞として見られている。

しかし，等位接続とはいっても，文の接続の場合は，二文を全く同等に結びつけているとは限らない。たとえ *and* が用いられていても，その両側の文を入れかえると，全く意味が変ってしまう場合がある。むしろ，それでも意味が変らない純粋な等位接続は少ないといえよう。文間の接続詞としての *and* は事実上は従属的関係を示すこともありうるのは良く知られている。この等位・従属関係は，それぞれの文の構造のみではなく，二文間の意味関係，さらに大きな文脈の中で，はじめて決定される場合が多いといえよう。このように文間において，等位・従属関係は入れ替りやすいものであるといえるが，語間ではどうであろうか。筆者は，この点にも関心をもっている。

次に，別の問題として，*and* で結ばれた名詞を含む等位句のある文は，通常，それら名詞のみが異なる二文により言い替えができることが多く，この両者の同義性が注目されてきた。これについて，二つの異なる説が生じた。一方は，前者が後者から縮約的に生じたという説，他方は，前者すなわち *and* を含む句は，単に同一範疇に属する語を加えたのみの，求心的 (endocentric) な拡大にすぎぬという説である。たとえば，

1) 語間では従位接続詞は一般に用いられない。語のレベルにおける従属関係を示す小詞は，印欧語では通常前置詞である [パウル　1976: 下　268]。実際には，英語の *before, after* などのように，同じ語が，文間では接続詞，語間では前置詞と呼び分けされている場合もある。但し，前置詞句が名詞を修飾している場合でも，実際にその前置詞句は高位の統語的範疇に属すると解釈できる場合が多い。

（例えば，*the book from England* の *from* は，*bought* や *imported* など動詞句に支配されていると解釈できよう。*the book (bought) from England*）このように，文間，あるいは動詞句に用いられる接続詞や前置詞が名詞間の関係を表す手段に転用されることはよくある。

2) 以降，本論で等位とは連結等位のことをいう。

3) 前置詞の場合，その補語といわれる名詞は，一定の rectio という形態をとることを要求される。英語では，普通目的格をとる。*the letter from him (*he)* これに対し等位詞の場合は，例えば *I and you are friends.* のように，同じ主格をとっている。

1. *Father and mother came.*

は，縮約説によると，

2. *Father came. Mother came.*

の縮約によるものであるとされ，拡大説によると，

3. *Father came.*

の *father* という主語が拡大されて 1. が生じたとなる。印欧語学者の間では Brugmann [1925: 84], や Paul [1960: 138] など拡大説をとるものが多かった。これに対し，ウラル言語学者 Ravila は，少くとも言語発展の観点からは，2. の表現が 1. に先行して用いられたことを主張した [RAVILA 1941: 40]。

現在，いわゆる学校文法においては，2. は 1. とは同義ではあっても，1. の主語をなす名詞句はむしろ拡大ととられることが多いようである（例えば，[GREENBAUM and QUIRK 1973: 267]）[4]。それは，次のような等位句を含む表現が縮約説では説明できないからである。

John and Mary make a pleasant couple.

初期の変形文法においては，文中の等位接続は二文から派生するものとされた。Chomsky はこう述べている [CHOMSKY 1957: 36]。

> If S_1 and S_2 are grammatical sentences, and S_1 differs from S_2 only in that X appears in S_1 where Y appears in S_2 (i.e., S_1=...X... and S_2=...Y...), and X and Y are constituents of the same type in S_1 and S_2. respectively, then S_3 is a sentence, where S_3 is the result of replacing X by X+and+Y in S_1 (i.e., S_3=...X+and+Y...)

つまり，*the scene of the movie was in Chicago.*

the scene of the play was in Chicago.

において，*of the movie* と *of the play* はそれぞれの文で，*the scene* の属格修飾という同じ機能をもち，それ以外の点では 2 文は同じである。したがって，次の文が派生される。

The scene of the movie and of the play was in Chicago.

しかし，文中の名詞句が等位接続詞 *and* を含む場合，必ずしも，上のような二文で言いかえうるとは限らないことが主張されはじめた。例えば，

John and Mary met.

4) 但し，動詞句，または，その一部分が直接連結されている場合は文の縮約とし，また *old and young men* などの場合も *old men(man) and young men(man)* の縮約とされる。

は，*John met. Mary met.* に言いかえることができない。したがって，ここではすでに深層構造のレベルで，*John and Mary* という名詞句が成立しているという説がたてられた。Lakoff と Peters [1969] は表面的には同様に等位接続詞をとっていても，二文に言いかえ可能なものを文の接続により派生されたという意味で文の接続 (sentence conjunction)，言いかえ不可能なものを名詞句の接続によるという意味で句の接続 (phrasal conjunction) と区別した。この二つの接続タイプの違いは，前者が both，後者が together をとるパラフレーズに言い替えが可能なのに対し，逆は成立しないことによっても証明された。

Both father and mother came.（文の接続）

John and Mary met together.（句の接続）

さらに，Lakoff と Peters は，句接続（句等位接続）を含む文，

John and Mary met. が，

John met with Mary. や

Mary met with John.

と同義であることに注目し，主語が句等位接続句である場合，その一方の名詞を *with, to, from* などを前置詞句におき，一方の名詞を主語とする文に任意的に変形しうるとした [Lakoff and Peters 1969]。

この深層構造における二つの等位接続の構造は，述語動詞によって決定されるとされ，等位接続詞を用いる代りに任意的に前置詞句の表現が可能な場合，そこに現れる述語を対称述語 (symmetric predicate) と呼んだ。たとえば *meet* (*with*), *mix* (*with*), *be similar* (*to*), *be parallel* (*to*) などがこれに当る。

ところで多くの動詞の場合，文接続と句接続の双方が可能であるため，主語が *and* によって結ばれる2名詞で形成されていると，両義的解釈が可能である。例えば，

John and Mary go to school. は，

John goes to school and Mary goes to school.（文接続）

John and Mary go to school together.（句接続）

John goes to school with Mary.

Mary goes to school with John

の二つの解釈が可能である。ところが，一般に静的 (static) な動詞の場合は，前置詞句による表現は不可能である。つまり，句接続を許さない。

John and Mary are tall. は，

**John is tall with Mary.*

**Mary is tall with John.* とは言えない。

以上をまとめてみると，英語において文中の名詞の等位接続 (N_1 and N_2) は，二つの異なる深層構造（文接続あるいは句接続）のいずれかから派生していると考えることができる。また深層構造に文接続がある場合，それは，二文をそのまま *and* で接続する表現 (N_1V and N_2V) の他に名詞句に等位接続を含む一文 (N_1 and N_2V) を派生させる。それに対し，句接続を深層構造にもつものは，N_1 and N_2V の他に，一方の名詞を前置詞句におく N_1V prep. N_2 を派生させる。つまり深層構造における二つの等位接続に対して表層では三つの文型が対応しており，二つの深層構造は一つの表層構造を共有することにより関係づけられているということになる。

更に注目すべきは，表層構造の一つの文型 N_1V prep. N_2 は，N_1, N_2 の句等位接続以外の関係をも表すということである。等位の場合，N_2 は N_1 に対して行為の共同者あるいは互酬的行為の相手で，N_1 と N_2 は相互に置換可能でなければならない。一方，これと同様の表層構造をとるが，N_1, N_2 の関係は，N_1 が行為者，N_2 は行為の手段，方法，あるいは受動的に行為に随伴するもので N_1, N_2 は置換が不可能なものがある。たとえば，

The boy went there with joy.

における *the boy* と *joy* の関係である。ほとんどの場合は，N_1, N_2 と V の意味関係により，深層構造で句等位か否かは明白である。しかし，実際の言語使用では，等位の場合も N_1 と N_2 を置換して言い直すこともないため，場合によっては，深層構造では句等位か前置句表現か，区別のむずかしい表層構造もありうる[5]。等位表現は，等位以外の表現とも絡みあっているわけである。

以上，等位接続に関する基本的用語と論点を明確にするため英語を例にとって示したが，ウラル諸語の場合でも同様に深層構造からみた二つの等位関係が表層の表現においては複雑に関係しあっているといえる。

Ⅲ．ウラル語族と等位表現の分類

まず，本論に入る前に，予備作業としてウラル系諸語の系譜関係，地理的分布，言語学的特徴について述べ，さらに，現在までウラル系諸語の等位表現に関する研究を概観したい。

5) 例えば *The woman came with her little baby.* と *The woman came with her husband.* では，後者は明らかに，主語と前置詞句を形成する語とは深層構造において等位関係にあると解釈される可能性が大きい。

ウラル語族（カッコ内は自称）

Uralic

- サモイェード Samoyed
  - 北グループ
    - イェニセイサモイェード（エネツ） Yenisei Samoyed (Enets)
    - タウギサモイェード（ガナサン） Tavgi Sa. (Nganasan)
    - ユラックサモイェード（ネネツ） Yurak Sa. (Nenets)
  - 南グループ
    - オスチャークサモイェード（セリクプ） Ostyak Sa. (Selkup)
    - サヤンサモイェード（カマス他） Sayan Sa. (Kamassian etc.)
- フィンウゴル Finno-ugric
  - ウゴル Ugric
    - オビウゴル Ob-ugric
      - オスチャーク（ハンティ） Ostyak (Hanti)
      - ヴォグール（マンシ） Vogul (Mansi)
    - ハンガリー（マジャール） Hungarian (Magyar)
  - フィンペルミ Finno-Permian
    - ペルミ Permian
      - ジリエーン（コミ） Ziryene (Komi)
      - ヴォチャーク（ウドムルト） Votyak (Udmurt)
    - フィンヴォルガ Finno-Volgaic
      - ヴォルガ Volgaic
        - チェレミシ（マリ） Cheremis (Mari)
        - モルドヴィン Mordvin
      - ラップ（サーメ） Lappish (Saame)
      - バルトフィン Balto-Finnic
        - フィン（スオミ） Finnish (suomi)
        - エストニア（エースティ） Estonian (eesti)
        - カレリア Karelian
        - ヴェプシャ Vepsian
        - ヴォート Vote
        - リーヴ Livonian
        - リュード Lude

図1　ウラル系諸語の系統分類図

言語名の略

Ye (nisei) Sa (moyed)　イェニセイサモイェード
Yu (rak) Sa (moyed)　ユラックサモイェード
Ka (mass) Sa (moyed)　カマスサモイェード
Ost (yak)　オスチャーク
Hun (garian)　ハンガリー
Zir (yene)　ジリエーン
Che (remis)　チェレミシ
Lap (pish)　ラップ
Fin (nish)　フィン
Est (onian)　エストニア
Liv (onian)　リーヴ
Lude　リュード

Ta (vgi) Sa (moyed)　タウギサモイェード
Os (tyak) Sa (moyed)　オスチャーク サモイェード
Vog (ul)　ヴォグール
Vot (yak)　ヴォチャーク
Mor (dvin)　モルドヴィン
Kar (elian)　カレリア
Vep (sian)　ヴェプシャ
Vote　ヴォート

1. ウラル語族

ウラル系の言語は，西は北ヨーロッパのスカンジナビア半島や中部ヨーロッパのハンガリーから東はウラル山脈東側，イェニセイ，オビ川流域にかけての広大な地域において話されている。諸言語間の比較研究が非常に進んでおり，ウラル語族内部の系統的分類においては，ウラル言語学者の間では，ほぼ説の一致をみている（図1）。また，それぞれ近縁関係にある言語間語派間では，共通祖語時代が設定され，もとのウラル祖語時代はおよそ6,000年ほど前まで続いたとされている（図2）。

次に，ウラル系諸語の地理的分布を示す地図を示す（図3）。

二図を比較すればわかるように，系統と地理的分布はほぼ対応しているといえる。恐らく，ヴォルガ，カマ川流域といわれる原郷から次第に東西へ分裂・移動していった状況が双方に反映していると考えられる。現在，バルトフィン，ヴォルガ，ペルミ，オビウゴルなど，それぞれ語派の下位グループに属する言語は構造的にかなり共通した特徴をもっているが，下位グループの間では大きく相違している場合があり，系統上の遠近は言語構造上の近似と必ずしも対応はしていない [Hajdú 1975: 45]。理由として考えられることは，第一に，異系統言語からの影響，第二に，個別的・自然的な変化，第三に移住先の先住民族言語との混淆，などである。少なくとも前者二つは確実に関与しているといえる。

印欧語(特にアーリア系)の影響は既に，フィンウゴル祖語時代から，少なくとも語彙上では認められている。しかし，言語構造に及ぶほどのものであったかはわかっていない。それに対し異系統言語からの構造に及ぶ影響が知られているのは，各語派以

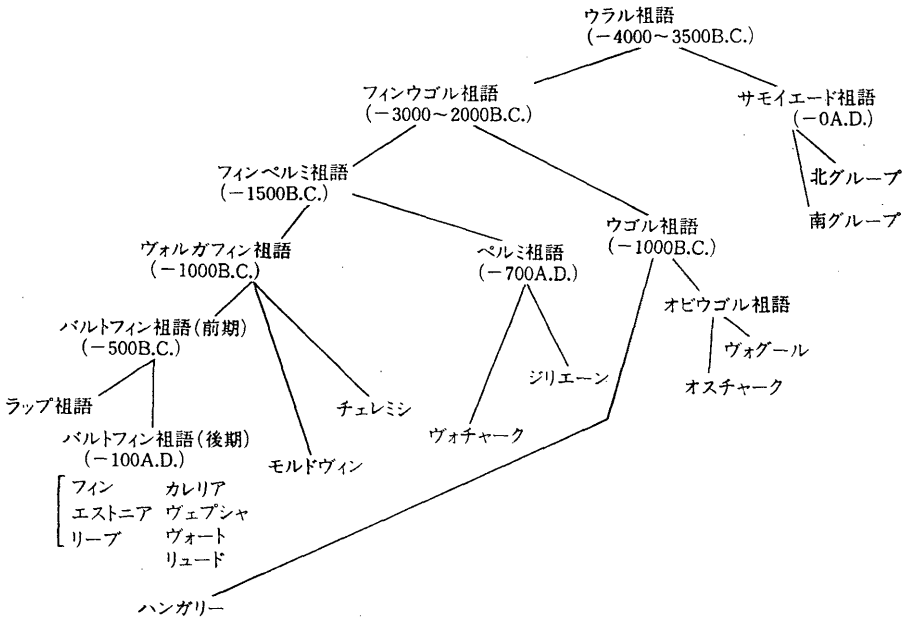

図2　ウラル語族の系統樹

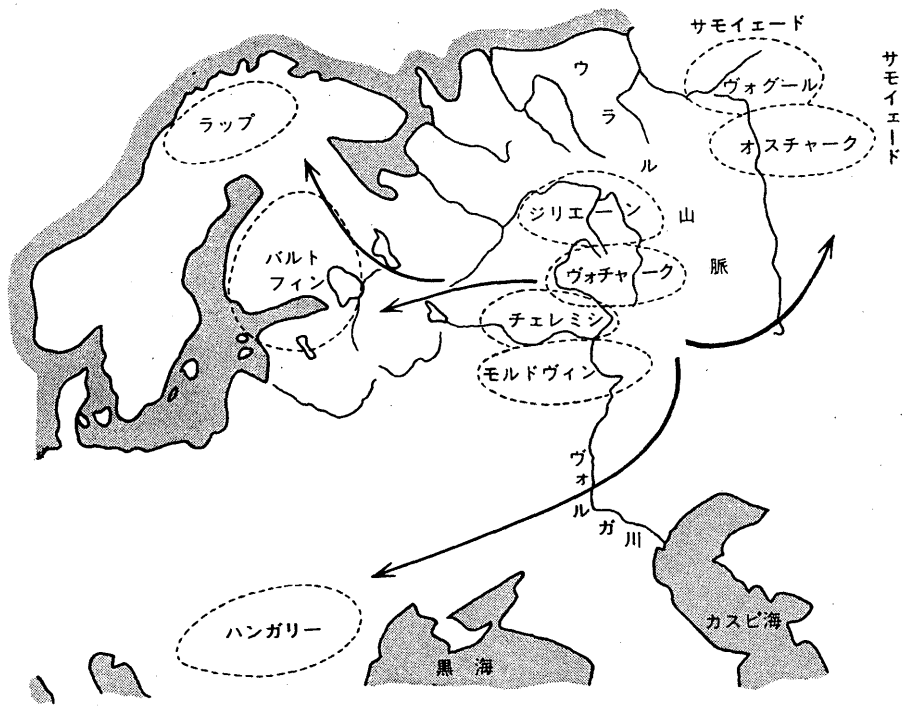

図3　ウラル系諸語の地理的分布と移動経路

下に分裂してからである。言語によっては，影響を与えた異系統言語は一つとは限らず，多層的に外来要素が重っている[6)]。

しかしながら，全体的傾向として，ウラル語的な特徴はまだ各言語に保たれているといえる。このうち，本論を進めて行く上で，直接関係のあるものだけ，ここでまとめて説明しておきたい。

基本的にウラル祖語は，グリーンバーク [GREENBERG 1963] などのいう SOV 言語あるいは後置的言語であり，それに関係して次のような特徴をもっているといえる。このタイプの言語の特徴は，原則として，修飾語が被修飾語に先行することで，ウラル言語学では Rectum vor Regens の原則といわれるが，これには，次のような関係が含まれる。形容詞＋名詞，副詞＋動詞，属格修飾＋名詞，目的語＋動詞，形容詞句＋名詞，副詞句＋動詞など。また名詞は主格形が二つ並置された場合は，前者が後者に対する修飾語となる。言いかえれば，元来ウラル語では連続する語の関係は，常に従一主であり，等位関係を表すことは原則としてできないことになる。さらに，印欧語的な，関係代名詞，関係副詞や従属接続詞と動詞の終止形を用いた従属節による表現は用いられなかった。その代り，従属節にあたる部分は述語動詞の名詞形，副詞形（分詞や不定詞など）を核とする名詞句，形容詞句，副詞句にまとめられ，本文の中の所定の位置に組み込まれて表現された。

この基本的な特徴は，ウラル語系の中でも東部の言語（サモイェード諸語，オビウゴル諸語）とチェレミシ語に残っている。他方，残りの西方の言語，特にバルトフィン諸語，ラップ語などは，動詞と他の要素との関係は，一応は自由語順といわれるが，印欧語的な語の配置がどちらかというと一般的である。つまり，動詞＋目的語，動詞＋副詞となる [TAULI 1966: 98–109]。またこれらの言語では，上に述べたような，動詞の名詞形や副詞形を用いる表現と共に，接続詞や関係詞を用いる複文表現が並存しているか，あるいは，前者より一般的である。これは，西側に行なわれる諸言語が，主にスラブ系やゲルマン系言語の影響を受けたことによるためであるとされる。そし

6) まず新しい層としては，現在も強力に進行中であるロシア語の影響が，ロシアと接触したウラル系民族の言語すべてにおいて著しい [BÁTORI 1980]。同様に，フィン語はスウェーデン語から，エストニア語はドイツ語から，リーヴ語はラトビア語からの要素が多い。ラップ語はスカンジナビア諸語，ロシア語に加え，フィン語からも影響をうけている。また，バルトフィン諸語は西暦前500年頃には，印欧系の古代バルト語の，西暦前後には古代ゲルマン語の強い影響下にあったことが知られている。ヴォルガ河流域のペルミ諸語，およびチェレミシ語は，8世紀からチュルク系ヴォルガブルガール（古代チュバッシ），更に13世紀以降は，強力なタタールの支配下にあった。一方，ハンガリー語はアリア系祖語との接触が長く続いた他，6世紀以降10世紀までの移動期には，ブルガール語などチュルク系諸語との影響下にあったといわれている。サモイェードでは，全体的にツングースとの影響関係にあった他，南サモイェード諸語には強いチュルク系諸語との接触を示す要素が多く残っている。

てチェレミシ語が比較的西側に位置するにもかかわらず，一見保守的な型を保っているのは，類似した構造をもつチュルク系言語の影響が強かったためであるといわれている [Comrie 1981: 102, 122]。

ウラル語のもつ後置性は，造語，および名詞や動詞が文法カテゴリーを選択する場合（曲用，活用），原則的に語根や語幹に後接される接尾辞によって行なわれることにも現われている。というのは，実際の統辞的機能を標示するのは，語幹ではなく，そのあとに来る接辞であって，いわば語幹は接辞に対して修飾語と同じ役割を担っているわけである。動詞活用に関与するカテゴリーは，時制，相，法，主語の人称，数[7]の他，サモイェード，オビウゴル諸語，モルドヴィン語では対称の人称や数によるものも存在する。名詞では，数の他，所有者の人称，数を示す所有人称接辞[8]，定・不定の区別（モルドヴィン）や豊富な格語尾がある[9]。また，他に後接されるものとしては，強意，疑問，話者の感情などを示す modalic な後接詞 (enclitic particle) および，文中の何らかの語に後接し，あとの文へつなげる後接的接続詞[10] などがある。また格語尾の機能を補うものとして後置詞がある。特に重要なことは，これら動詞や名詞に後接する要素（派生語尾，数，人称語尾など）がすべて，原則的には，文法的範疇（文法的意味）と形態素との間で一対一の対応をなしていること，さらに，同一形態素に属する異形の差が少いということである[11]。これは，本論で述べられるように，ウラル系諸語の等位表現に用いられる同一要素反復の原理に深く関係している。

---

7) すべてのウラル諸語は，数カテゴリーとして単数，複数をもっているが，サモイェード，オビウゴル諸語とラップ語は双数をもつ。ただし，ラップ語の場合，双数カテゴリーは，動詞，人称代名詞，所有人称接辞に限られており，名詞にはない。

8) これは，エストニア語を除くほとんどのウラル系の言語に残るウラル的特徴の一つである。これによれば，人称代名詞による所有は，人称，数を標示する要素が語尾に後接されることになる。フィン語の kirja「本」にすべての人称接辞をつけるとこうなる。1. sg. kirja-*ni*「私の本」，以下同様に，2. sg. -*si*, 3. sg. -*nsa*, 1. pl. -*mme*, 2. pl. -*nne*, 3. pl. -*nsa*.

9) フィン語では15，ハンガリー語では23の格語尾がある。フィン語の場合，いくつか例をあげると，kirja-n（属格），kirja-a（部分格），kirja-na（様格），kirja-ssa（内格），kirja-sta（出格），kirja-tta（欠格），など。

10) これらは，オビウゴル諸語やペルミ系のジリェーン語やヴォチャーク語などで見られる。これらが，比較的後に発達したものであること，文の等位に用いられる要素と関連の深いことを Fokos-Fuchs が述べている [Fokos-Fuchs 1961]。

11) これは一般に言語類型学で膠着語といわれる言語の特徴である。ただし，現在サモイェード諸語などでは多少潰れている。形態素と意味・機能の一対一の対応について，フィン語で例示すると，*talo-i-ssa-ni*「私の（複数の）家において」*talo* '家'，-*i*- 複数，-*ssa*- 内格，-*ni* 1. sg. の所有接辞。また異形の差も，母音調和，その他語幹の音構成によるもので自動的なものである。これに対し，印欧語などでは，1つの形態素が複数の文法カテゴリーを内包している場合が多い。ロシア語の *работ-е*「仕事に」（女性，単数，与格）と *стол-у*「机に」（男性，単数，与格）において，同じ与格であるにもかかわらず，形態上の共通点はない。また，一つの文法カテゴリーに対して，いくつかの非自動的異形が存在する場合がある。例えば英語の複数によく現れている。ox-*en*, *geese*, child*ren*.

2. ウラル系諸語の等位表現の分類

上に述べたように，ウラル系諸言語が基本的には，印欧語の接続詞とは異なる等位表現を行なっていたことは早くから論じられていた。印欧語の従属節に当るものは，動詞の名詞形や副詞形などにより表現されることについては，しばしば触れられることはあっても，等位表現に関しては，文間，句間，語間にかかわらず，一般に並置が基本であるということで，大して関心は払われていなかったようである[12)]。

I 章で例にあげたとうり，ウラル諸語では語の等位には，他の言語事象を用いて迂曲的に表現することが多いが，これらは，各言語の記述文法で個々の特殊な表現として述べられるか，せいぜい他言語の類似した例を示すにとどまっていた。その後，これら言語事象それぞれについてウラル諸語間での比較研究が進むなかで，等位表現自体に関心が向けられるようになった。そうした中で，Lewy, E の研究 [Lewy 1911] は，ウラル系諸語間（ハンガリー語，オスチャーク語，ヴォチャーク語）における語や文の等位を本格的に比較したものとして重要である。Lewy はこれらの言語において，しばしば対となって現れる語を中心に，二名詞がどのような方法で等位関係におかれるかを豊富な例をあげ検討した。ここにあげられた等位表現としては，並置された全く同じ二文のそれぞれに現れる場合，格，人称，双数標識やその他，後接辞など共通の要素をそれぞれが伴って並置される場合，従格語尾が一方，または双方に用いられる場合，等位詞を用いる場合，そして合成語に近い，語の単なる並置などである。

ウラル諸語の等位表現に関して，個別的に進められてきた等位表現に関する諸論を一応統合したのは Ravila [1941] が最初である。Ravila はオビウゴル諸語において双数が等位関係にある二名詞に用いられる現象について，同一要素反復により等位性を示すためであるとした。彼によれば，ウラル諸語のもつ語順の基本的原則[13)] により，等位表現として名詞の並置は制限されていたため，双方に同一範疇にあることを示す格語尾などが接続された。しかし，そのような語尾がつかない場合は，直接意味的に関与しない要素が二次的に用いられたという。さらに，等位関係を示すため，従格語尾や形容詞の派生接辞などが一方に後接されることがあったが，これらも場合によっては他の一方にも反復されたと主張した。このようにウラル諸語の等位表現が単なる並置ではなく，迂曲的で多様なものにならざるを得ないことをウラル語の基本的統文

12) 例えば，D. R. Fuchs [1937: 317, 318] は，これをウラル系・アルタイ系の共通点の一つとしている。

13) これは前述した Rectum vor Regens の原則で，先行する説は後続の語を修飾するということ。

構造に結びつけたのは大きな功績であるといえる。

以降，Ravila 自身 [RAVILA 1943, 1960] やその他[14] により，いくつかウラル諸語の等位表現についての言及があるが，すべて Ravila [1941] の焼直しである。

しかし，Ravila をはじめ，等位表現に関する研究は，等位概念を漠然ととらえるのみで，先に述べたような文等位，句等位の区別をしない。また，等位表現のタイプの説明では，例のあげ方が恣意的で他のタイプとの関係や，他の言語事象とのつながりに対する考察が不充分であるという欠点があった。

本論では，現在までのウラル諸語の等位表現に関する記述や研究の中から，検討を進めるための枠組として，種々のタイプをとり出し，次のように分類した。種々の等位表現は全体として，統辞，形態，音韻，意味のレベルと深くかかわっており，個々の表現にとって，各レベルのもつ重要性は異るため，分類の基準を一貫させることは不可能である。したがって，最も本質的であると思われる特性をもって，タイプ設定の目安とした。また表現によっては，いくつかのタイプにまたがるものもあるが，本論ではタイプ間の関係について述べる際，触れるつもりである。次章ではこの分類に従い，それぞれの言語からできるだけ同じ条件の例をあげるよう努めた。同時に等位表現と何らかの接点をもつ事象についても，等位表現解明にとって重要と思われるものは，考察の対象とした[15]。

ウラル系諸語における等位表現のタイプ

1. 同一形態素をもつ名詞の並置[16]

   A-x B-x; AN BN; AdjA AdjB; A-x B-x-y

2. 同一形態素をもたぬ名詞の並置

   A B; A B-x

3. 数標示素を用いる表現

   A-du. B-du.; A-du. B-du.-x; A-pl. B-pl., A B-du.(pl.); A-du.(pl.) B-com.; A-coll. B-coll.; A-coll.(du., pl.)

---

14) 例えば次のようなものをあげることができる [FOKOS-FUCHS 1962: 102–105], [ITKONEN 1966b: 315–317], [BÁTORI 1969: 11–16], [KARELSON 1958]。

15) 言語の例はできるだけ言語資料として記録され出版されたものから拾うよう努めたが，用例を見つけることができなかった場合，各言語に関する論文などに挙げられているものを用いた。煩雑になるのを避けるため，例の出典に関しては筆者が直接引用した文献を明らかにするに止める。また同一言語内でも引用にある例は，異る方言から採用された場合もある。例の表記法は，方言の違い，原典の表記システムの違い，また音声学的精密さの程度により，多少異なるが原典からそのまま引用した。本論では，各か所で当該言語要素の同定ができ，文中での位置がわかれば充分であるため，非常に困難な表記法の統一は行なわなかった。

16) 語間の関係を示す，自律的小詞なしに二語を続けて配置することを並置とする。

4. 従格（具格）を用いる表現

A-com. B～B-com. A; A-com. B-x; A-com. B-com.

5. 具備形容詞派生接辞を用いる表現

A-pos. B; A-pos. B-pos.

6. 追加・強意の後接詞を用いる表現

A-aug. B-aug.; A V B-aug.

7. 自律小辞的等位詞

A co. B; co. A co. B

8. 借用語に起源をもつ等位詞

A co. B; co. A co. B; A‿co. B; A‿co. B‿co.

Ⅳ. ウラル語族の等位表現

本章では一つの文中に二語が等位関係に置かれた表現を対象として論ずる。先にも述べたように，英語では，二語の等位句を含む文は，深層構造に二種類の等位をもち得た。一つは，深層構造で既に二語が等位関係にある場合（句等位），他方は，文の構造要素のうち，その二語のみが異る二文の等位（文等位）である。等位表現のタイプ1，同一形態要素をもつ名詞の並置——の性格を明確にするため，文等位について，少し考察したい。深層構造の文等位は，先にも述べたとうり，二語を等位関係において表現できるが，同時に二文のまま並置して表現できる。

Fin.　Isä ja äiti tulevat.

父　co.　母　来る。「父と母が来る」

たとえば，上の文を例にとって，文等位が深層構造にあると解釈した場合，次の二文で表現できる。

Isä tulee.　Äiti tulee.

このような例は，サモイェード諸語においてよくみられる。

Os. Sa.　pangam iset,　pitjem iset.　[Castrén-Lehtisalo　1960: 243]

小刀　とった　斧　とった

「彼は小刀と斧をとった。」

Yu. Sa.　niśaβ　taňeβaś　ńēʙ̀ā̆β　taňeβaś　[Castrén-Lehtisalo　1960: 347]

私の父　そこにいた　私の母　そこにいた

「私の父と私の母はそこにいた。」

また，その他のウラル諸語にもいくつか同様の例が記録されている[17]。

Vog.　χum χuiąm, tąβ āmpɛ χuiąm. [Kannisto 1951: 62]
男　眠った　彼の犬　眠った

「男と彼の犬は眠った」

Ost.　ēva pora vērāi,　paga pora vērāi　[Lewy 1911: 56]
娘　儀礼　行なわれた。若者　儀礼　行なわれた。

「娘の儀礼と若者の儀礼が行なわれた。」

Voty.　busijä pŏräm kŏl'leś-däjleś　ačid　ut',　azbarä pŏram kıl'leś-
野を　行く　病気　やまいから　自分を　守れ　屋敷を　行く　病気

däjleś　ačid　ut'　inmar.　[Lewy 1911: 93]
やまいから　自分を　守れ　神よ。

「神よ，野や屋敷を行く病気やまいから御自身をお守り給え。」

Vep.　tul'īŋ　kod'he, kod'is ʌapsed　voikabad, tütred voikabad,
私は戻った　家へ　家で　子供たち　泣く　娘たち　泣く

[Pulkkinen 1966c: 333]

「家へ帰った。子供たちや娘たちは泣いていた。」

Lude　a　vie　mel'l'iʇtšass‿ol'i　ižanD,　metšpert'iss‿ol'i　ižanD
しかし　まだ　粉ひき小屋に　いた　守護霊　森の小屋に　いた　守護霊

[Pulkkinen 1966c: 333]

「しかし，粉ひき小屋と森の小屋には守護霊がいた。」

Ravila は言語発達史的には，このような二文による表現の方が，一文の中に名詞の等位句を含む表現より古いと主張している [Ravila 1941: 40, 1943: 255]。

これと類似した表現に次のような場合がある。すなわち，並置されるのは二文ではなく，等位関係にある名詞（句）を含む文の一部である。言いかえれば，全文をくり返すのではなく，一方の文と同じ部分を等位関係にある説に添え，対句的表現とするわけである。このような対句的表現はオスチャーク語やヴォグル語では詩的技巧として頻繁に用いられている [Lewy 1911: 92, Steinitz 1976: 29]。

Ost.　ēva nūbot, paχ nūbot ńutteteu [Lewy 1911: 56]
女　命　男　命

「女と男の命にかけて誓い合った。」

Vog.　mōš-ne āɣikwe śepn pāl'-konsəp　pinəs,　nāj-aχwtas　pinəs,　lēstan
縫い袋　入れた　火打石　入れた　石盤

pinəs. [Kalman 1976: 60]
入れた

17) Pulkkinen [1966b: 318] は，現代フィン語においてこのような表現は，古形を保つというより，むしろ文体的効果をねらったものだとしている。同様にヴォチャーク語でも，主に呪文などに限られることが指摘されている [Lewy 1911: 92]。

「moš-ne の娘はポケットに縫い袋と火打石と石盤を入れた。」

Zir.　Lun tŭr, voj tŭr on uźlĭ, on śojlĭ [LYTKIN 1882: 46]
日 一杯 夜 一杯

「日も夜もおまえは眠らなかった，食べなかった。」

Mor.　śupav éŕzań ul'neś ajgorozo paro, ul'neś bukazo. [COLLINDER 1969: 238]
あった 立派な 種馬 あった 雄牛

「金持の éŕza 人(モルドヴァ族の一支族)に立派な種馬と雄牛があった。」

Fin.　hakkasin härät pieniksi paloiksi, puut pieniksi paloiksi.
雄牛 小さな 破片に 木 小さな 破片に

[PULKKINEN 1966b: 317]

「雄牛どもと木々を小さな破片に切りきざんだ。」

このような表現も必ずしも，すべてのウラル系諸語で頻繁に現れるとはいえないが，等位関係にあるそれぞれの名詞が，同一の語群に伴われているため，同じ範疇に属していることが明らかである。したがって等位表現としては，少々冗長であるが，支障が全くないといえる。

こうしてみると，これから最初に検討しようとする名詞の並置による等位表現は，二文の並置から，当該名詞以外の語を一方の文から省略していった場合の極限とみることもできよう。

ただし，ここでみたような文の並置はもちろん，その他にも等位関係にある名詞と文の一部が並置されている場合は，論理的にみて，深層構造における文の等位から導かれていると考えられるのに対して，次で扱う名詞のみの並置による等位表現は，必ずしも文の等位から派生したものとはいえない。

1. 同一形態素をもつ名詞の並置

まず，等位関係にある名詞が，同じ形態素をもっている場合について考えてみたい。このタイプの例は，ほとんどのウラル系諸語でみられるが，この場合，同一の形態素としては，主に名詞変化の文法カテゴリーである，格，所有人称接辞，および数接辞[18] などである。これには，大きく二つの種類がある。一方は，形態素が，文中において，本来の文法的，あるいは意味的関係を示している場合。他方は，そのような本来の機能を担っているとは考えられない場合である。ここではまず，前者をとりあげる。(A-x B-x)

18) これについては 3. 節で別に考察する。

Os. Sa. illi lada°-p, samastrel-p [Szabó 1967: 34]
弓 -acc. 矢 -acc.

「弓と矢をとれ。」

この例では，それぞれの名詞につく共通の形態素は対格の語尾であり，それぞれ個別的に述語動詞の目的語であることを示している。したがって，直接，等位を示す要素は両者の間に存在しないが，同じ範疇に属し，同じ文法的機能を担っていることで，等位にあることがわかる。同様の例を他の言語から拾ってみよう。

Yu. Sa. Man ~ôłeko ~as nisea-si nibea-si hajidm. [Castrén 1855: 375]
父-car. 母-car.

「私は小さい時，父なし母なしになった。」

Ost. ēvej-a pag-a jastet [Ravila 1941: 28]
少女-lat. 少年-lat.

「彼は少女と少年に言った。」

Hun. az tele van arany-nyal, ezüst-tel. [Lewy 1911: 3]
金 -instr. 銀-instr.

「小箱は金と銀で一杯だ。」

Zir. jur-tög, böz-tög cetćalan. [Lytkin 1882: 46]
あたま-car. 尾 -car.

「あたまなしでしっぽなしで（おまえが）跳ぶ。」

Voty. so nîl askaz tṣukna lîktiz mumi-z-ńε aii-z-ńε kamaliien.
母-3.sg.-all. 父-3.sg.-all.
[Wichmann 1901: 137]

「次の日，彼女は kamali 章をつけて父母のところへ来た。」

Che. mužan-lan, ioza-lan piš ᵊńänät ɑlɑn perβi. [Ramstedt 1902: 207]
予言者 -all. 魔呪師-all.

「以前，人々は予言者と魔呪師をよく信じた。」

Mor. ozaś papa-ń d'iakono-ń parańt'e i tuś. [Paasonen 1941: 231]
牧師-gen. 執事-gen.

「彼は牧師と執事の馬車に座った。」

Lap. kaallazanǯ-e aagkanj-e šandaj alge. [Itkonen 1966b: 317]
男 -ill. 女 -ill.

「男と女に息子が生まれた。」

Est. need olid minu isa-le ema-le liiga rikkad. [Mihkla-valmis 1979: 91]
父-all. 母-all.

「それらは私の父と母にとって多すぎた。」

次に，等位関係にある二名詞には，直接に文法機能を示す格語尾はないが，その代

りに同一の形態素として，所有人称接辞，数接辞，派生接辞などがついた例をみよう。

Ost.　jū·χt-en ńɔ·t-en ještə·tət. [STEINITZ 1975: 270]
　　弓-2.sg. 矢-2.sg.

「おまえの弓と矢は用意できた。」

Vog.　i̯ɔŋ̆kp-i χɔtəl-i χōt[19] ōloà? [KANNISTO 1951: 52]
　　月-3.sg. 太陽-3.sg.

「月と太陽はどこにいるか」

Voty.　sokuı mumi-z aji-iz lı̯ktı̯mtɛ saldatlen mı̯nı̯l'l'am ut't'śanı̯ soı̯ɛ.
　　母-3.sg. 父-3.sg.

[LEWY 1911: 26]

「そこで来なかった兵士の母と父は彼を捜しに行った。」

Che.　əδərəm ät'ä-žə äβä-žə mäɣ'räš tı̯ŋgälət [RAMSTEDT 1902: 195]
　　父-3.sg. 母-3.sg.

「娘の父と母は泣きはじめた。」

Lap.　ālı̯uò mìèši̯e k'rājj'ālɛ [KARELSON 1958: 197]
　　牡牛-pl. 仔牛-pl.

「牡牛や仔牛がモウとないている。」

上の例にある形態素はそれぞれ，文中で本来の意味を担っている。

以上のことからいえることは，等位表現として二名詞を並置する際，それらが文中で同じ機能を果していることを標示できれば並置表現として可能であると推測できる。先に示した例のように，等位関係にある語が，文中で主語（あるいは目的語）以外の機能を担っている際，すなわち何らかの斜格をとる場合，それらの格語尾が双方の語に加わっていることが条件になる。一方，主語（あるいは目的語）であるため，格語尾をとらない場合は，後の例でみたように，人称接辞，複数接辞などがあれば，等位関係にあると見做されていたようである。

恐らく，このような段階が長く続いたのち，二語に何らかの共通要素があれば，等位関係があるという言語意識が生まれてきたのであろう。

Ravila の説によれば，二語が同一要素をもつ場合，等位関係にあると見做され始めたきっかけは，名詞の格変化より早く発達した動詞活用にあるとする [RAVILA 1941: 48, 1943: 257]。すなわち，述語として動詞が並置された場合，それらがもつ共通の活用語尾がまず，二語間の等位性という言語意識を生み出したと主張する。しかし，筆者の考えでは，この章のはじめで述べたとうり，もし，二語の並置が，二文

19) 第3人称の所有人称接辞はこの場合のように，実際の第3人称の所有者を示すのではなく，定性 (definiteness) を標示する場合がある。

の並置が縮約することによって生じたとするなら，Ravila の仮定する前提は，名詞の同一要素による等位を促進することになったかも知れぬが，必要条件ではなくなる。なぜならば，二文による表現を縮約して一文の中に名詞の等位関係を表現しようとする以前に，単文における各語間の機能を格で標示することは既に始まっており，同一要素をもつ二語が同一文中に現れる条件はあったと考えるからである。したがって，縮約により並置される語には，それぞれ格語尾が付いていたと考えるのが自然であろう。

さて，等位関係にある二語に何らかの同一語が付随する場合には，特に，格語尾，人称接辞などの形態素がなくても並置が許される場合がある。次の例では，二つの名詞句が，それぞれ，名詞＋名詞，又は形容詞＋名詞で成り立っており，前後いずれかの語が同じである (AN BN) (AdjA AdjB)。

Ost.　šṷ̆kŋ̆ nē šṷ̆kŋ̆ χṷ̆ tiləś tētə tēt-ot āttəs. [STEINITZ 1975: 287]
貧しい女 貧しい男

「貧しい女と男は一ケ月分の食糧を運び出した。」

sar-jink, mag-jink tāptāi, jāṅgai [LEWY 1911: 60]
ビール 飲料 蜜 飲料

「ビール，蜜酒は食べられ飲まれた。」

Vog.　"šlejew" nampa nājən-χāp tāɣt-ja, sakw-ja χosit jalasi. [KÁLMÁN 1976: 58]
Soswa 川 Sygwa 川

「蒸気船 slejew 号は Soswa 川と Sygwa 川を航行した。」

sē(ml ṷ̆i β̆ɣr ṷ̆i sāβ sṷ̆mia̯χ u̯(rŋ pālt βóō(rŋ pālt tāᵞintapti.
黒い 獲物 赤い 獲物

[KANNISTO 1951: 251]

「黒や赤の獲物のための倉を山の背や森で一杯にした。」

Che.　ola korak, šem korak lum ümbalne jorɣalat. [PAASONEN 1939: 114]
からす からす

「からすと野がらすが雪の上で行き来する。」

ここで，この節のはじめに述べたもう一方の並置，つまり，双方の名詞に現れる形態素が本来の意味・機能を担っていないと思われる表現が，以上述べてきた同一要素反復による等位の原理を示していると思われる例がある。次の例では，同一の語尾が双方の名詞に接続されているが，本来の文法機能でなく，等位性を示すためのものと思われる。次のように第3人称の人称接辞を用いて名詞を並置させる表現は，フィン語で発達したが，意味的には全く剰余的である。

Fin.　saa itse olla isäntä-nsä emäntä-nsä. [PULKKINEN 1966b: 148]
主人 -3.sg. おかみさん-3.sg.

「自分は主人やおかみさんでいればいい。」

次のエストニア語の例では，双方に部分格が用いられているが，本来部分格はこのような他動詞の主語の位置には現れないものである。

Est.　Mats-i Tõnis-t jõid wēl õlle ära. [WIEDEMANN 1875: 325]
-part. -part.

「マッチとテンニスは更にビールを飲み乾した。」

このように，同一要素を用いた例は，比較的東側の諸語に多いと思える。それに対し，バルトフィン系諸語およびハンガリー語では，さほど多くない[20]。後でも触れるように，後者の場合は，周囲の印欧語の影響が強く，いわゆる純粋な等位（接続）詞が発達していることも理由の一つであろうと考えられる。さらにバルトフィン諸語の場合は，個別発達の段階で名詞を修飾する形容詞が，数，格において一致しはじめ同じ語尾をとるようになったため，同一要素反復による等位の原則が乱されたためということを指摘する説もある [ITKONEN 1966: 414]。

しかし，全体としてみた場合，この等位表現はウラル諸語の中で広く見られ，また次に検討する同一要素をもたぬ並置に比べ，名詞の意味的制約もないことから，ウラル的表現として，かつてはプロダクティブに用いられたのではないかと考えられる。ここで，今まで述べてきたような表現を仮に，同一要素反復による等位表現と呼ぶことにする。

今までの例では，同一要素が一つの場合がほとんどであったが，実際には，二つ以上存在する場合が多い。

Yu. Sa.　tjūr-um-da jinje-m-da ob ȕdahanda njamāda. [RAVILA 1941: 57]
追い棒-acc-3.sg. 革ひも-acc-3.sg.

「彼は一方の手に追い棒と革ひもをつかんだ。」

Ost.　oɣ-əl-na, sèm-əl-na nèŋχoi̯i̯i̯ i̯is. [LEWY 1911: 19]
頭-3.sg.-Lok. 目-3.sg.-Lok.

「彼は頭も目も男らしくなった。」

Vog.　ton šəńə-tā̆-(tl, ton kąməp-tą̆-(tl tåt̆ sə̆nəli, tåt̆ kämpəli.
この 裕福-3.sg-instr. この ぜいたく-3.sg.-instr.

[KANNISTO 1951: 191]

20) フィン語における名詞並置による等位表現を分析した Pulkkinen によると，そのほとんどが決った語の対をなしており，いくつかの格に固定された，いわば慣用句的性格を帯びているという [PULKKINEN 1966b: 150–154]。

「この裕福さと贅沢さで，彼はあちらで裕福に生き，あちらで贅沢に生きた。」

Hun.　az apj-uk-at, anny-uk-at is êvittek. [LEWY 1911: 4]
父-3.pl.-acc. 母-3.pl.-acc.

「彼らは父と母をもつれ去った。」

Voty.　so nil askaz tšukna lîktiz mumi-z-ńε aii-z-ńε kamal'iien.
母-3.sg.-all. 父-3.sg.-all.

[WICHMANN 1901: 137]

「次の日，彼女は kamali 章をつけて父母のところへ来た。」

Mor.　tosa uskftiŋźä víŕi śtiŕ-iŋǵ-iť tśor-iŋǵ-iť. [PAASONEN 1941: 231]
娘-dem.-acc. 少年-dem.-acc.

「そこで彼らは娘と少年を森へつれて行った。」

ところが，これらと並んで，次のような例も見られる。すなわち，並置された名詞のうち前方からは，語幹に近い同一要素を一つだけ残し，残りの要素は省かれる (A-x B-x-y)。言いかえれば，後の名詞の要素がすべて，前の名詞にも働いているということであるが，この現象は，ウラル学者などにより，Suffixlockerheit（語尾の緩み）と呼ばれている [LEWY 1911: 21]。この現象はウラル諸語はじめ，いわゆるアルタイ諸語によく見られるが，これらの言語の格語尾が，独立した語から後置詞を経て，次第に独立性を失い名詞に接続されるようになったという仮定を支えるという説がある。しかし，このような現象はウラル諸語の中でも限られた言語に現れる一方，印欧系の言語でも時折見られることは知られている[21]。Ravila は，ウラル語の格語尾の基本的なものは，後置詞から発達したものではないと主張し [RAVILA 1941: 33]，更に，チュルク系における同様の現象も新しいものであるという Grønbech [Der türkische sprachbau I, Kobenhagen 1936] の説を紹介している。Itkonen は，これの理由として，等位関係にある二語が，相互に接近した結果まとまったものとして見做されるようになったためである [ITKONEN 1966b: 317] としている (A-x B-x-y)。

Ost.　kur-en uč-en-a..... kerŋemtītada [LEWY 1911: 21]
足-2.sg. 着物-2.sg.-lat.

「おまえの足元に，おまえの着物にひれ伏す」

Vog.　śań-im āś-èm-nė [RAVILA 1941: 29]
母-1.sg. 父-1.sg.-lat.

「私の母と父に」

21) 例えば，ドイツ語の der Wert deines Grund und Bodens「あなたの土地・領域の価値」で，属格の -s は Grund から落ちている。

Hun.　hogy joga-ink-, önállás-unk-, nemzeti szabadság-unk-ból egy haj-
　　権利 -1.pl.　主権 -1.pl.　国の　独立 -1.pl.-elat.

　　szálnyit is engedjünk [Lewy 1911: 7]

　　「我々が自身の権利，主権，国家的独立において1歩たりとも譲るということ」

Che.　təδe aβa-m a(tša-m-letš kotšo nästä. [Paasonen 1939: 223]
　　母-1.sg.　父-1.sg.-abl.

　　「これは私の母と父があとへ残したものだ。」

このような例は，名詞につく接尾辞として格語尾が最後に来る言語に限られているように思える[22]。これらの言語では，前の名詞からたとえ格語尾が省かれても，人称接辞，数などが同一要素として存在していれば等位と見做されるからであろう。オスチャーク語やヴォグール語に比較的よく見られるが，オスチャーク語においては，前述したような二つ以上の同一要素が並ぶ場合（A-x-y B-x-y）より，むしろ多いようである [Lewy 1911: 13–22, Bouda 1933: 63–66]。特に，後で述べる双数接辞が同一要素として用いられる場合，格はほとんど後の名詞にのみ現れるといえる。

Ost.　iχe-ŋen jēvre-ŋen-a partet [Bouda 1933: 65]
　　熊-du.　狼 -du.-lat.

　　「彼は熊と狼に命じた。」

また，同一要素が人称接辞や数接辞ではなく，形容詞などの修飾語としてそれぞれの名詞に附加されていれば，前の名詞からは格が省かれる場合がある。

Ost.　ser unt, mor unt-na nui-ištaniṅ χo šušḭl. [Lewy 1911: 15]
　　未開の 森　孤独は 森-lok.

　　「未開で孤独な森を毛織のズボンの男はさまよった。」

　　äńa mḭg, äńa jiŋ-na [Bouda 1933: 64]
　　見知らぬ 地　見知らぬ 水-lok.

　　「見知らぬ地で，見知らぬ水辺で」

Hun.　mintha önálló ország önálló hatalom-mal alkunék
　　独立した 国　独立した 権力 -instr.

　　[Lewy 1911: 7]

　　「あたかも独立国や権力を商談しているように」

22) 格語尾が人称語尾のあとに来る言語としては，オスチャーク語，ヴォグール語，ハンガリー語があり，反対に人称語尾が最後に来るものには，バルトフィン諸語，ラップ語の他，モルドヴィン語もほぼ加えることができる。ジリエーン語，ヴォチャーク語，チェレミシ語では格により人称語尾と順序が入れ替る。

2. 同一形態素をもたぬ名詞の並置

これには，二つの場合が考えられる。まず一方に，等位関係におかれる名詞が単数主格（あるいは言語によっては対格の場合もある。）で何ら数，格を示す接辞をとらず，また人称，派生接辞ももたぬ場合（A B）。他方は，前節で，Suffixlockerheit に関して述べたように，先行する名詞から全ての接辞が欠如しているため，二語が連続した場合である（AB-x）。

まず，前者のケースの例を示す。（A B）

Yu. Sa. man teamdawaeu har, sumba [CASTRÉN 1855: 385]
小刀　斧

「私が買った小刀と斧」

Kam. nɯ'kɛ βɯčzi amnōbi'i'. [DONNER 1944: 158]
老女　老人

「老女と老人がいた。」

Ost. šaj tut juχ ālman wur śorŋəlman [STEINITZ 1975: 105]
茶　火　木

「茶と薪をはこびながら，血を流しながら」

Zir. syly panyd lovas šańga-gruda, ńan-tupõś. [ITKONEN, E. 1966b: 316]
パン　積み重ね　大きい　パン

「彼の方にパンの山とパンのかたまりがやって来る。」

Mor. pop diakon sasť [ITKONEN, E. 1966b: 316]
牧師　執事

「牧師と執事がやって来た。」

Kar. hänelleh izä, emä küzütäh. [KARELSON 1958: 205]
父　母

「彼に父と母が尋ねる。」

Lap. algaj nijd ɖorgen maazad. [ITKONEN, E. 1966b: 315]
少年　少女

「少年と少女は家へとんで帰った。」

このような語尾をもたぬ語のみの並置は少い。上の例のように，二語が分離して記録され，それぞれ独自のアクセントをもち，語としての自律性を保っているとみられる場合でも，二語間には一定の意味的関連性があるようである。実際にこれらは，後者がアクセントを失い前者に融合し，究極的には一つの概念を表す等位合成語（copulative compound）とほとんど区別のつきかねる場合がある。

Ravila は，ウラル諸語では基本的にこのような語の並置による等位表現は制限されていたと仮定している [Ravila 1941: 41]。理由としては，Ⅱで説明したウラル語統語における法則である Rectum vor Regens に反するからである。これによると，修飾語は被修飾語に常に先行する。つまり名詞が並置されていると，前者は後者を何らかの意味で限定することになり，等位関係は表せないことになる。例えば，「父」と「息子」という語が並ぶと，「父と息子」ではなく「父の息子」ととられるわけである。

しかし，Ravila らは，印欧語における語並置に対してたてられた仮説 [Brugmann 1925: 136] に習って，Rectum vor Regens の法則に逆って並置された語が等位関係と見做されるには次のような条件を満たしていれば可能であったとする [Ravila 1941: 41; Lewy 1911: 5; Batori 1969: 11]。

1. 二語が反意語である
2. 二語が同意語か，類意語である
3. 三語以上の並置

ペルミ系のジリエーン語とヴォチャーク語では，このような名詞並置による合成語が非常に豊富であるが，これについて論じた Bátori は Ravila と同じ観点から等位合成語を位置づけ，その成立過程を次のように説明する [Bátori 1969: 12–13]。すなわち上の条件を満たし，当初等位関係にあるとして並置された二語は，その意味的関連性ゆえ対として一概念を形成しはじめ，それぞれが独立性を失っていったと推定する。

このように二語が対等の関係で結びついた合成語はウラル系諸語に多く存在する。例えば「顔」「表情」を意味する合成語をあげることができる [Bátori 1969: 12]。

Ost.	ńot-sēm	<「鼻」+「目」
Vog.	ńal-sam	<「鼻」+「目」
Hun.	orca<orr-száj	<「鼻」+「口」
Zir.	nir-vom	<「鼻」+「口」
Voty.	im-nir	<「口」+「鼻」
Est.	suusilmad	<「口」+「目」

その他，いくつか同種の例をあげる [Fokos-Fuchs 1962: 71; Bátori 1980: 154]。

Ost.	jai-apsi	「兄弟」<「兄」+「弟」
Voty.	aɣaj-vẹn	「兄弟」<「兄」+「弟」

Che.	iźaj-šolaj	「兄弟」	<「兄」 +「弟」
Zir.	bat′-man	「両親」	<「父」 +「母」
	nj̆v-pi	「子供たち」	<「少女」+「少年」
Fi.	maailma	「世界」	<「地」 +「空」
Hun.	adás-vétel	「商買」	<「売り」+「買い」

次に，並置されている二語が本来は同じ語尾をとるにもかかわらず，前の語からは，語尾は全く欠如し，後の語のみがとる場合についてみてみよう。(A B-x)

Ost.　man pot′-xos-a　juvem. [LEWY　1911: 13]
　　糞 汚物-Lat.

「私は汚れてしまった。」

Vog.　sūp nélm-tal [RAVILA　1941: 31]
　　口 舌 -car.

「口も舌もなしに」

Hu.　Be sok aj-baj-jal　jár ez a mezei gazdálkodás! [LEWY　1911: 6]
　　悲しみ 痛み-instr.

「実際，大変な悲しみと苦しみとともにこの農業は去って行った」

Voty.　lék śin-pel′-leś ačid ut′-vordî [LEWY　1911: 41]
　　目 耳 -abl.

「おまえは悪い目と耳から自分を守る」

このような表現は，先に見たように，並置された，合成語に近い二語の連合 (A B) が，一つの語尾をとったとも解釈できると同時に，一方では，1. で見たように本来同一要素をもって等位関係にあった二語 (A-x B-x) の前者から，同一要素を削除したものとも，とることができる。しかし，後者の場合は，少くとも，等位表現としては一種の後退であり，不自然であるといえよう。なぜなら，上の例からもわかるように，ここに並置されている名詞の対は，(A B) の場合と同じように，ほとんど合成語に近いものである。つまり，ここでも二名詞は，まとまった一つの概念をもつものと考えられ，むしろ原初的な並置のタイプに近いと見做すことができよう。

しかし，二語の単なる並置と合成語の境はあいまいである。二語の結合が弱いものは，文脈によってはそれぞれ独立性をもつ場合も考えられる。次の例は，同じ二語の対が (A B-x) と (A-x B-x) の表現形態をとっている[23]。

23) ロシア語にも数例がある [BRUGMANN and DELBRÜCK　V. 1900: 188]。pojti jemu ku otcu-
　　to 父
　　materi (поити ему к отцу-матери)～ku otcu ku materi (к отцу к матери)「彼は父と母の
　　母
　　ところへ行かねばならない。」

Vog.　sup-ńelm-tal ～ sup-tal ńelm-tal [Bouda 1933: 64, 65]
口 舌-instr.　口-instr. 舌-instr.

「口や舌で」

Hu.　hegy-völgy-et ～ hegy-en völgy-ön [Lewy 1911: 4, 6]
山 谷-acc.　山-supr. 谷-supr.

「山と谷を」　「山や谷で」

Voty.　śin-pel′-lî ～ śin-lî-pel′-lî [Lewy 1911: 41]
目 耳-all.　目-all. 耳-all.

「目と耳に」

上に述べてきたような同一要素をもたぬ名詞の並置 (A B), (A B-x) は，少なくともプロダクティブな等位表現としては機能していないように思える。上のようにいくつかあげた例でも，二名詞間には何らかの対をなす意味関係が存在するようである。ここで改めて，1. の同一要素をもつ並置と比較してみると，等位表現としての生産性の違いは歴然とするように思える。やはり，この事実によっても，Ravila が仮定したとおり，Rectum vor Regens の法則が語の並置を制限していたのであろう。名詞の並置による等位が可能になり，比較的自由に表現されるようになったのは，VI. 1. で述べたように，格をはじめ，その他接尾辞による曲用や派生のパラダイムが発達し，これら形態素が同一要素として反復されることが，等位の一つの標識として理解されてからのことであろう。Ravila によれば並置による等位表現にさらに優利に働いたのが，述語動詞における数活用の発達である [Ravila 1941: 48]。つまり，等位にある名詞が主語の場合，述語動詞の複数・双数標示が，並置されている二名詞は互いに限定関係にあるのではなく等位関係にあることを示したと考えられる。

3. 数標示素を用いるタイプ

1, 2, が等位表現として，何らかの形で並置を出発点としているのに対し，数（複数・双数）を標示する要素を利用する表現がいくつかの言語でみられる。ウラル諸語の文法的カテゴリーとしての数は単数・複数の他，双数がサモイェード諸語，オビウゴル諸語，およびラップ語にあらわれる。このうち等位表現に用いられるのは双数と複数である。

最初に双数を用いる表現をとりあげることにする。まず双数の本来の用法を示す。

Ost.　χuị̂-ŋən ollə-ŋən
男 -du.　生きる-du.

「二人の男がいた。」

ところが，次の等位表現では，二つの名詞双方に双数の標示素が用いられている。(A-du. B-du.)

Yu. Sa. jä̰ mīðäχäňnŋ̣ β̃ᵃ ȅsōk̆ko-χò'' puχū(ťśa-χà'' tänńńēββäχȅ''ᵃ. [LEHTISALO 1947: 9]
老人 -du. 老女 -du. du.

「地球ができたとき，老人と老女がいた。」

Хада-хаю-да ири-хию-да тăмна хоныхы' [TERESHCHENKO 1973: 19]
老女 -du -3.sg. 娘 -du.-3.sg. du.

「老女も娘も歌っている。」

Ost. ime-ŋən ike-ŋən ūsŋən. [STEINITZ 1975: 138]
女-du. 男-du. du.

「女と男がいた。」

Vog. mōś-nē-χ, por-nē-χ ōlēχ [KALMAN 1976: 58]
mos-女-du. por-女-du. du.

「mos 女と por 女が住んでいる。」

これらの例では，並置された二名詞はともに主語であり，双数の接辞をとっている。注目すべきは，名詞は双数接辞をとってはいても，一つのことを示している。次の例では，並置されている二名詞は主語以外の位置を占め，それぞれ斜格，あるいは後置詞をとっている。ここでも，名詞はそれぞれ一つのものを示していると考えられる。(A-du-x B-du-x)

Yu. Sa. Вадё'' махадан нися-хаю-н, небя-хаю-н нядаба пяŋгудм'
父-du.acc.-1.sg. 母-du.acc.-1.sg.

[TERESHCHENKO 1973: 19]

「私が大きくなれば，父と母を助けるだろう。」

Vog. kañk-äχ-ä pālt ä̰ńχ-äχ-ä pālt jälēs
兄-du.-3.sg. 'to' 姉-du.-3.sg. 'to'

「兄と姉の方へ行った。」

これと非常によく似た等位表現が印欧語にも見られることは，Gauthiot [Du nombre duel. Festschrift Vilhelm Thomsen. Leipzig 1912: 127–132] によって指摘され，同じ性格をもつものであるとされた[24]。たとえばインド古典語のヴェーダ語には，次のような双数による等位表数がある。

mitrā́ váruná [BRUGMANN and DELBRÜCK II-2 1911: 459]

「ミトラとヴァルナ」(双方とも双数形)

24) ウラル系，特にオビウゴル諸語の双数についての諸説は [RAVILA 1941], [BOUDA 1933] に紹介されている。

Brugmann はこのような双数の用法を省略の双数 (der elliptische Dual) と呼び[25]，本来，双数形で示された名詞はそれだけで，父・母，日・夜，父・息子，天・地，母・娘などのように親密な関係にあるもの (schwestliches Verhältnis) の一方をも含意するものであったとする [Brugmann and Delbrück II-2 1911: 454]。したがって，mitrā́ 一語で，「mitra とそれと同属のもの，すなわち varuna」と解釈されたことになる。そして，次の例のように，その一方は，説明し，補塡する意味で単数形で置かれることもあったとする [Brugmann and Delbrück II-2 1911: 459] mitra..... várunah また，最初の例のように両方が双数形で現れたのは，単数形が双数形に一致したからであるとされる。

このような印欧語の双数並置に対してたてられている説をオチスャーク語，ヴォグール語のそれに適用しようとする考えに対し，Ravila は異なった立場をとった。彼によればウラル系言語における双数は本来，印欧語のそれとは性格を異にするもので，天-地，日-夜，父-母など同属をなす対を一方の双数形で表すことはなかったとする[26] [Ravila 1941: 22–23]。

以上のことから，等位表現に用いられる双数の要素は，同じものが二つあること（2数）でも，対をなすと見做される同属のもの二つ（両数）をさすわけでもないことになり，二次的・迂言的な用法ということになる。そして，Ravila は，ここに現れる双数も，1，2，で見てきたような同一要素反復による等位表現のための，純粋な手段にしかすぎぬとする [Ravila 1941: 27]。

事実，彼が言うように，次の例に現れる双数は，数要素をとるはずのない副詞に用いられており，ここでは，等位性を強調するために附加されていると考えられよう。

Ost.　toɣoś-ŋən tiis-ŋən uandiidənna mola ɒndâs. [Ravila 1941: 27]
こっち-du.　あっち-du.

「おまえがこっちやあっちへ現れて何の役に立つか」

それではなぜ，この手段に双数が用いられるようになったかについて，Ravila はこう説明する。名詞の双数曲用より以前に存在していた述語動詞の双数活用に，まず主語である名詞が呼応し始めた。そして，その後等位関係にある名詞が並置されると双方に双数が用いられ，等位のための同一要素として機能しはじめた[Ravila 1941: 54, 56]。このRavila の説については，後に触れることにする。

ともあれオスチャーク語，ヴォグール語では双数の接辞は，人称接辞などと並んで，

25) 印欧語では双数には，自然双数，省略双数，照応双数などと呼ばれる用法がある [Brugmann and Delbrück 1911: 454–461]。

26) Ravila の考えでは，これが可能なケースは，双数が anaphorical に用いられる場合で，文脈により既に一方が明らかにされている場合に限る。

等位表現の同一要素としては非常に頻繁に用いられており，名詞が何らかの斜格をとる場合には，並置される前の名詞からは省かれる。また名詞が後置詞をとる場合も同様に，後の方にだけつくのが普通である。(A-du. B-du.-x)

Ost.　topas-ŋən χōt-ŋən χośa joχtəs. [STEINITZ 1975: 281]
倉庫-du.　家-du.　'to'

「彼は倉庫と家に到着した。」

iχe-ŋen jēvre-ŋen-a partet. [BOUDA 1933: 65]
熊-du.　狼 -du.-lat.

「彼は熊と狼に命じた。」

Vog.　jäɣ-äɣ-ä āñkw-äɣ-ä pālt joχtẹs. [BOUDA 1933: 22]
父-du.-3.sg.　母-du.-3.sg.　'to'

「彼は彼の父と母のところへやって来た。」

ta ēkwä-ī' ājkä-ī'-nel tēlėm aɣit pīɣėt. [BOUDA 1933: 14]
女 -du.　男-du.-sep.

「その女と男から系統をひく息子たちや娘たち」

オスチャーク説ではこのタイプは先の A-du.-x B-du.-x に比べより一般的である。次に複数標示素を用いた等位表現をみることにする。まず例をあげる。(A-pl. B-pl.)

Mor.　ärıť aštıť aťa-t baba-t. [PAASONEN 1941: 230]
老人-pl.　老女-pl.

「あるとき1人の老人と老女がいた。」

Lap.　aččie-h čiǯǯie-h [BERGSLAND 1946: 267]
父 -pl.　母 -pl.

「父と母」

Fin.　onko..... papa-t mamma-t elossa? [KARELSON 1958: 197]
父 -pl.　母 -pl.

「おとうさんとおかあさんは生きていますか。」

Kar.　isä-t äitji-t kuoldih [PULKKINEN 1966b: 116]
父-pl.　母-pl.

「父も母も亡くなった。」

Est.　sîs tulàD isà-D, emà-D ning teinè perè [PULKKINEN 1966b: 116]
父-pl.　母 -pl.

「そして，父と母と他の家族もやって来た。」

ここでも，A-du. B-du. の場合と同様に，それぞれの名詞は単数を意味していると見るのが正しいであろう。Ravila はこのような複数標示素の現れることについて，モルドヴィン語，ラップ語の場合において，上の A-du. B-du. のタイプと同じ性格のものであるとする。つまり，オスチャーク語やヴォグール語の双数標示素と同様に純

粋に等位表現のための同一要素として発達したものだとする [RAVILA 1941: 105]。一方他のバルトフィン系言語においては，誇張の表現として，つまり，等位関係におかれた二名詞の他に，それらと関係のあるものすべてを含意する意味で複数が用いられるという，複雑な解釈をしている [RAVILA 1941: 106–107]。すなわち，

Kar.　šiidä izännä-t emännä-t nostah huondekšel [RAVILA 1941: 107]
　　夫 -pl.　妻 -pl.

「そこで，夫と妻らは朝，起きた。」

で，izännät emännät は「夫と妻」ではなく，「夫や妻やその他の人々」を指しているとする。さらに次のヴォチャーク語の例では，複数の -jos- が入っているが，文脈から同じように解せるという。

Voty.　ok taiε, mumi-jos-î ai-jos-î　taiε vandi·zî ug [LEWY 1911: 50]
　　母-pl.-1.sg. 父-pl.-1.sg.

「ああ，私の父と母らはそれを何と刺し殺してしまった。」

その他，ジリエーン語には，

mamjaskęd　(mam ('母')-jas (pl.)-kęd (instr.))

のように，「多くの母と」ではなく「母たちと」＞「母と父と」「両親と」を指すような複数の用法があったとしている。

これに対し，Pulkkinen は，上にあげたような例はすべて根本的に同じ性格をもつものであると考える [PULKKINEN 1966b: 116, 171]。つまり，同一要素として複数が双方に用いられているとする。そして，なぜ複数が用いられているかについては，意味されるものが複数（父と母）であり，また，そのそれぞれを強調するためであると推測する。

今までのすべてを考慮に入れてみると，並置される名詞双方に，双数や複数要素が用いられていることは，やはり，同一要素反復による等位表現と考えて極めて自然なことであろう。しかし，なぜ，これらの数の要素が用いられ始めたかについて，完全に納得できる説明は与えられていないように思える。興味深いのは，複数を用いるのは名詞変化に双数をもたない言語であるということである。したがって，双数や複数は，同じ理由から等位表現に用いられているとは考えられないであろうか。これに対して示唆的な例がある。

Os. Sa.　ära paja-la mi sun njōdádet. [RAVILA 1941: 58]
　　老人 老人-pl.

「老人たちが我々に伴なった」

Ost.　ai mandu tąus-ŋən　sidi mand-ən èuəlt lòn'dət àkməsmel.
　　マンドウ ツングス-du.

[BOUDA 1933: 29]

「小さいマンドウとツングースは行きつつ雁をとった。」

Mor.　a toso pop d'iakon-t ńešť ťejńešť. [PAASONEN 1941: 309]
　　牧師　執事-pl.

「牧師と執事の馬車に座った」

上の例では，双数や複数の接辞は後の名詞についている。ここでは，suffixlockerheit の現象と異なり，前の名詞から接辞が省略されたと考えるよりむしろ，これが原型に近いもので，この形式から双数，複数の接辞が同一要素として，前の名詞へも移ったと考えることはできないであろうか。

一般に考えられているように，双数や複数は，それらが接続する名詞と同種のものの2数，複数性を示すと見做すこともできようが，むしろ元来は，それら名詞で示されたものと同属のものを含意するとみることも可能であると思う。つまり，前出の Ravila がヴォチャーク語の mamjasked を「母と母の同属の人びと」>「母と父と」と解した例，更にヴェーダ語の mitrá (du.) のを「ミトラと同属のもの」>「ミトラとヴァルナ」の場合と類似している。しかし，後者の印欧語で省略の双数と名づけられている場合のように，いわば二元論に近い観点により固定化された一対，一組としてでなく，状況や文脈において決ってくる対，集団の緩い概念とみるべきであろう[27]。ウラル系の言語において，このような緩い対，集団の概念を表現する習慣のあることは，次のラップ語の例にも現れていると思う。

ラップ語において，双数は文法範疇としては動詞，人称代名詞，人称接辞にのみ存在し，名詞の曲用にまで発達していない。しかし，それに代るような表現法が存在する。

Lap.　Āslâk-guovtŏs Mikkaliin boattĕbâ. [SAMMALLAHTI 1972: 165]
　　A. -二人組　M.-com.

「Aslak と Mikkal がやってくる」

guovtŏs は guokte「2」から派生した名詞で「2人組」を意味し，Aslak-guovtŏs は「アスラクたち二人」のことである。そしてその相手は従格で表される。この場

27) 日本語の 'たち' 'ら' はむしろ印欧語の複数より，こちらに近いと思われる。例えば，昔語「桃太郎」で，

猿たちは桃太郎に従った。

という場合，猿たちは複数の猿のことではなく，「猿と仲間」すなわち「猿と犬と雉子」のことである。

しかし，必ずしも現在のウラル諸語の双数や複数がすべて，このような性格をもっているとは言えない。特に近代印欧語との均密な接触関係にあった言語では，数の概念も一般印欧語的文法範疇に編成されているといえよう。

合の相手は文脈によって決るもので，印欧語の省略の双数のように自明の対を成しているものではない。これと類した表現に人称代名詞の双数形を用いるものがある。

mâi Bierain　(mâi は mon '私' の双数形，Bierain は Bieraの従格形)

ここでは，「私ともう一人，つまり Biera」ということになる。これと類似した表現は印欧語[28] でも知られている。双数形をもたぬウラル系言語では，複数の人称代名詞が用いられる。(A-du.(pl.) B-com.)

Hun.　a nélkül is úgy elaslz-unk mi　édes anyám-mal együtt. [Lewy 1911: 52]
　　私たち　私の母-com.

「それなしにも私は愛する母と一緒に眠った。」

Fin.　Me　mentiin kauppaan Pekan kanssa.
　　私たち (du.)　'with'

「私と Pekka は店へ行った。」

しかし，このような A-du. (pl.) B-com. の前の部分 A-du. (pl.) は，必ずしも，この表現に先立って独立して用いられていたとは断言できない。というのは，この表現は次項で述べる従格を用いる表現の基本型 (A-sg. B-com.) と類似しており，場合によっては，後者のタイプの A-sg. が述語の双数性，あるいは複数性に呼応したとも考えられるからである。

いずれにせよ，対，集団の概念をそれを代表する名詞の複数や双数形により表現しようとする傾向は，ウラル系諸語にはあったようである。たとえば次のオスチャーク語やヴォグール語の接辞で Bouda [1933: 60], Liimola [1963: 199] の造格辞と見做すものにも見られると思う。基本の形はヴォグール語では -(V)ńš- で，更に複数標識 -t をとる場合がある。Bouda は前者を相互的双数，後者を複数と呼ぶ。オスチャークでは，基本的には -sa- で双数語尾をとると -saŋən，複数の場合には -sat になる。仮にこれらを「集合接辞 (coll.)」と呼ぶことにしよう。

Vog.　jūpū-ńśit　jūäwi-ńśit　ạlạntēt [Bouda 1933: 61]
　　兄-coll. (pl.)　妹-coll. (pl.)　(pl.)

「兄と妹が住んでいる。」

kaśś-ińś　ieɣpʲɣ-əńś　βõrnà　miṅesàɣ [Liimola 1963: 199]
　　弟-coll.　兄 -coll.　(du.)

「弟と兄が森へ（狩猟に）行った。」

28) 例えば次のようなロシア語の例がある [Brugmann and Delbrück III 1900: 256] jedina nasu matuska su toboj rodila (едина нас матушка с тобой родила)「母は，私とおまえを生んだ。」
　我々　'with'　おまえ

Ost.　iəɣǎŋk-i̯sat i̯əpaχ-sàt i̯əwət [Bouda 1933: 63]
妹-coll.(pl.)　兄-coll.(pl.)　(pl.)

「妹と兄が来た」「妹たちと兄たちが来た。」

i̯ēɣpáχ-sāŋən i̯əɣǎŋk-i̯sā̃ŋən i̯əwɣən [Bouda 1933: 63]
兄-coll.(du.)　妹-coll.(du.)　(du.)

「兄と妹が来た。」

ここでもやはり，1，2，で見たように，双方は共通の接辞をもっているため同一要素による等位表現と酷似している。実際ここでも同一要素として，集合接辞が働いていることは否定できないであろう。ところで Bouda などの言うとおり，次のように二名詞のうち一方のみに，この接辞が現れる場合，集合接辞のついた方が従格的（～と一緒に）意味で用いられていると解釈されることがある。

Ost.　aps-isà-ŋən kàt χoi̯ ollə-ŋən [Bouda 1933: 62]
弟-coll.-du.　2人 男　(du.)

「弟と2人の男がいる」=「弟と兄」

χùtə̂m ǎŋk-ìsǎ-t [Bouda 1933: 62]
3人　母-coll.-pl.

「母と3人」=「母と2人の子供」

Vog.　íė kwältė jäni jēkwä puw-iṅś ōliji [Bouda 1933: 61]
老いた　女　息子-coll.　(sg.)

「この家には老いた女が息子と住んでいる」=「老いた女と息子が」

āš pi̯ɣ-i̯ṅś miṅásáɣ [Liimola 1963: 199]
父　息子-coll.　(du.)

「父は息子と出発した」=「父と息子は」

しかし，集合辞のついた名詞を従格的副詞「～と一緒に」と解釈できる場合は，たまたまそれを述語の限定語とも見做せるだけのことであって，本来はやはり，集合辞として考えた方が良いのではないか。たとえば，オスチャークの例の

aps-isà-ŋen kàt χoi̯
弟-coll.-du.　2人 男

は「弟と2人の男」と解すより，「弟ら，2人の男」=「弟と兄」と見ることも十分可能である。

次の例では，集合，対の概念が一層明確に出ていると思う。

Ost.　ǎŋk-i̯sā̃ŋən i̯əwɣən [Bouda 1933: 62]
母-coll.(du.)

「母たち（二人）が来た」=「母と娘～息子」

Vog.　εm tε'n i̯ü̯pü̯-ńʌ́šť-ʌnǎl i̯ō̃tsəm [Liimola 1963: 200]
兄-coll.(pl.)-sep.

「私はこの兄弟たちから買った。」

man šạk kēš-iństˇ　[LIIMOLA　1963: 200]
　　弟-coll.(pl.)

「私たちは兄弟だ。」

このヴォグール語とオスチャーク語の要素は，フィンウゴル祖語の指小辞 *ńčˇ に遡るとされ，現在も広く見られる [BOUDA　1933: 62; RAVILA　1941: 51] が，次の例のように，やはり親族名などとともに用いられて，集合や対の概念を形成しているのは注目すべきである。

Lap.　āččis

「息子と父，娘と父」

Fi.　veljekset

「兄弟」

Est.　pojatsed

「息子たち」

この要素の他にも集合，対の概念はウラル系諸語で散見できる。

Mor.　ṕeťa-ḿeźe-n vaks [RAVILA　1941: 104]
　　'何'-gen.　'to'

「Petja と彼と同属の人々へ」

Che.　aťšà-mət tòˑlə̂t möŋgə̂ [RAVILA　1941: 104]
　　父-'家族'

「父は家族とやって来た。」

また既に上で述べたヴォチャークの複数接辞 -jos- は Collinder によると「人々」を意味する語から来て「～の家族の人々」「～に同席する人々」を指したという [COLLINDER　1969: 278]。たとえば anaj-jos は「父と一緒の人」，「父と母」を意味する。つまり，語源的にも同属集団を示す複数であったといえる。

4.　従格（具格）を用いるタイプ

ここで検討する等位表現は，本来同伴者，手段などを示す従格（具格）的要素（接辞・後置詞）を用いる[29]。まず，一方の名詞のみ従格で現れる例をみる。

29) 従格「～と一緒に」や具格「～によって」は意味的に交錯することが多く，言語によって呼称のみの違いで内容はほぼ同じである場合が多い。従って，両者は特に区別して扱わなかった。また，オスチャーク語の場合では場格が用いられているが，事実，場格が具格的意味をもつ場合がある。

jɔχtat śēmpṛ kew-na joṅttət. [STEINITZ　1975: 233]「その人々は石で弦いた。」
　　石　lok

Yu. Sa. mań ńēβˈǎn ńǎ'' jīl'ēββp̣''ª [CASTRÉN and LEHTISALO 1960: 348]
私　母　com.　(pl.)

「母と私は一緒に住む」

Os. Sa. onǯi kuačogandi kuannaɣe, mātti serle näl debi-s-ki [SEBESTYÉN 1958: 16]
妻　夫-instr.-empl.

「家へ向いつつ，夫と妻は自分たちで町へ着いた」

Ost. lolmaχ oχsar pilna mɒnlə-ŋən [BOUDA 1933: 58]
クズリ　狐　'with'　(du.)

「狐とクズリが行く。」

i·j χụ̄ ji·ɣ-ēwet-na ụ̄tta·ŋən [STEINITZ 1975: 233]
一人の男　妹　-lok.　(du.)

「妹と一人の男が住んでいる」

Vog. ạ̄tėr-āɣi mēt-nē-tä-tėl joχts-ị̄' [BOUDA 1933: 58]
君主の娘　下女-3.sg.-com.　(du.)

「下女と君主の娘がやって来た。」

jukǎ-nėt ǎ̄nčuχ ạ̄lst [LIIMOLA 1963: 119]
女-com.　老人　(pl.)

「女と老人が住んでいた。」

ämp-nạ̌t məšäχ ụ̄(kụ̄ì·n ä· aʌà:ntạ̌t [LIIMOLA 1963: 120]
犬-com.　猫　(pl.)

「犬と猫は一緒に住まない。」

Voty. vumurt gondị̄r-en śàrīśị̄ kiźil'l'am [LEWY 1911: 26]
水男　熊-instr.　(pl.)

「熊と水男は人参の種を蒔いた。」

Zir. sar-pi ni̯v-ke̯d pi̯šjasni̯ [UOTILA 1938: 48]
皇帝の息子　娘-com.　(pl.)

「娘と皇帝の息子は逃げた。」

Che. perβi i' mara-δona βätə əlnet ɑlɑn [RAMSTEDT 1902: 184]
1人　男-'with'　女　(pl.)

「むかし，あるとき，1人の男と女が住んでいた。」

Mor. kerhkskä martha šäjõrńa vidõsť sura [ITKONEN, E. 1966b: 315]
すずめ　'with'　ねずみ　(pl.)

「すずめとねずみがきびを蒔いた。」

Lap. ko toh Vuollī-in ohtan moonàáin [BARTENS 1972: 69]
彼　-com.　(du.)

「Vuolli と彼が一緒に行った時」

Liv.　kass̆ irə̂-ks　āt　je'llənd‿ī'tskups [KARELSON 1958: 209]
猫　ねずみ-trans. (pl.)

「ねずみと猫が一緒に住んでいた」

Fin.　Tyytyväisiin kuuluvat myös Oskari Tokoi puoliso-ine-en.
(pl.)　夫人-com.-3.sg.

[PULKKINEN 1966b: 15]

「また，Oskari Tokoi も夫人とともに満足した人々に入っていた。」

Est.　Isa poja-ga läksid linna. [KARELSON 1958: 209]
父　息子-com.　行った (pl.)

「父と息子は町へ行った。」

以上のように，本来は述語に対して従属的な副詞句を形成するはずの従格その他斜格要素がここでは，述語動詞の双数，あるいは複数性からもうかがえるように，主語である名詞と等位関係を保っている。（但し，バルトフィン語での例はむしろ例外的に複数をとっている。）ここでの従格は，ウラル祖語時代，等位詞のまだ発達しない段階に等位表現のために迂曲的に用いられたものと見ることができないであろうか。

従格が等位表現に用いられるには次のような過程を経ていると考えられる。まず，第Ⅰ章で述べた等位表現のもつ二義性，つまり，等位関係におかれて表現される二名詞には，句等位と文等位という二つの深層構造があるということと関係してくる。そして，従格を用る本来の副詞的表現が上の一方である句等位と意味的な接点をもっていたため，等位関係を迂曲的に表すようになったと考える。

上の例で等位表現に用いられた従格（具格）の本来の副詞的用法は次のようなものである。

Ost.　i̯ā̆i̯əm-nā̆ mənəs [KARJALAINEN 1964: 154]
斧-com.

「斧を携えて行った。」

Voty.　bur-i̯n-i̯z śiṅm-i̯n-i̯z ad'd'źɛ [WICHMANN 1954: 139]
良い-instr.-3.sg.　目-instr.-3.sg.

「良い目で見た。」

Che.　ik fukur dono agal edemil'en kerdesh [WIEDEMANN 1847: 170]
パン　'with'

「人はパンのみでは生きられない。」

まず，このような文型に，句等位表現が投影されたと推測される。つまり，次の例に示すように，等位表現の第一段階として，一方の名詞が主語として現れ，述語動詞は単数形をとる文型が存在したと考えられるが，これは，上と表面的には全く一致している。いうまでもなく意味論的には本来の従格表現における主語と従格名詞の関係

は，句等位における二名詞の関係とは異なるものである。従格表現においては，従格におかれた名詞は主語である名詞に対して，付随的，受身的である。これに比して，等位関係にある二名詞は，同等に能動的，自主的である。しかし，これら二つの場合に共通している点としては，行為はただ一つのみであり，それぞれの二つの名詞は互酬的で，他方の存在を前提としているといえる（文等位では，これは言えない）。この両義にまたがる性格を，一般に従格は有しているらしいことは，多くの言語で，それが副詞的に用いられる場合と同伴や行為の相手を示す場合があることからも理解できる。ウラル系諸語にもこのように，述語は単数形にとどまりながらも，従格（具格）におかれた名詞と主語の関係はほぼ対等で，むしろ句等位として理解できると見做される場合が多い。

Vog.　mā ūtn pil-χujem piln jaχləm [Rédei 1965: 75]
　　私　友人　'with'

「私は友人と森を歩いた。」

Zir.　kolys ötik mama-ön [Wiedemann 1884: 127]
　　母-instr.

「（彼は）母と一緒に死んだ。」

Voty.　anai-i̯en atai mar kad′ potɛ vå̯u̯? [Wichmann 1893: 85]
　　母-com.　父

「どうして父は母と今やってきたのか。」

Mor.　son jartsy es jalganzo marto [Wiedemann 1865: 93]
　　友人-3.sg.　'with'

「彼は友人と食べた。」

Fin.　kirkkoherra rouv-ine-en astui suorastaan pihalumeen. [Pulkkinen 1966b: 15]
　　牧師　夫人-com.-3.sg.

「牧師は夫人と庭の雪に，降り立った。」

このような段階を経て，本来，述語に対して限定的機能をもっていた従格が，文法的には次第に名詞付随的（adnominal）な性格を帯びていったと考えられる。その結果，多くのウラル語では，次の例のように従格が名詞と文法的にまとまりのある名詞句を形成していると考えられる場合が少ない。

Yu. Sa.　čońa ʔapīnta-ńāŋ [Sammallahti 1974: 95]
　　狐　熊-g.-3.sg. 'for'

「熊と狐」

Os. Sa.　ira iman-opti [Lewy 1941: 57]
　　老人　老女-com.

「老人と老女」

Vog.　khátėl-net jī [LIIMOLA　1963: 119]
昼-com. 夜

「昼と夜」

Hu.　férj feleségé-vel [BÁTORI　1969: 13]
夫 妻-3.sg.-instr.

「妻と夫」

Zir.　jen omel'-kud [BÁTORI　1969: 14]
悪魔-com.

「悪魔と Jen」

Voty.　tṣ̌i̯ŋ-en tṭ̌l [WICHMANN　1954: 139]
煙-instr. 火

「煙と火」

Che.　kaza den maska [ITKONEN, E.　1966b: 315]
山羊-com. 熊

「山羊と熊」

Mor.　ofta martha riviś [ITKONEN, E.　1966b: 315]
熊 'with' 狐

「熊と狐」

Fin.　isä poik-ine-en
父 息子-com-3.sg.

「息子と父」

Kar.　löttö čiiliŋ-ke
かえる はりねずみ-com.

「はりねずみとかえる」

Liv.　ludəttabàt sút-kəks [OINAS　1961: 15]
狐 狼-com.

「狼と狐」

そして，この名詞句が，文法的にも等位関係にある二名詞を内包すると見做されるようになると，すなわち，名詞付随的 (adnominal) 副詞句がそれにより修飾される名詞と同じ文法的機能をもつものと理解されるようになると，最初の例でみたとおり，その名詞句が主語の場合，述語は双数，複数形をとるわけである。この段階で，はじめて意味論的に，そして文法的に等位表現として完成したものと見做すことができよう。ただし，述語が双数や複数をとるに至る過程は，単独に進んだというより，おそらく同じく等位表現として並存していた 1. A-x B-x, 2. A B, 3. A-du. B-du. な

どの等位表現では，述語が元来双数，複数であったことに影響されたための混淆とみた方が良いかも知れない[30]。

そして，次の例のように，従格の等位表現としての用法は，主語のみに止まらず，文中の他の要素にも現れうる。(A-com. B-x)

Vog.　ḳȯšȯt ḳȯl'ts ȯχšȧr-nēt mišḳɛrχ-nɛl [LIIMOLA 1963: 120]
狐 -com.　若者 -abl.

「(彼は) 狐と少年から遠くに残った。」

Voty.　arak-en sur-ez juyum [WIEDEMANN 1884: 230]
酒-instr.　ビール-acc.

「私たちは酒とビールを飲んだ。」

ajj-ṭṣöž·en mumj-ṭṣöz·leś ujamzɛ gjnɛ ad'd'źim [WICHMANN 1954: 139]
雄ガモ-instr.　雌　ガモ-abl.

「雄ガモと雌ガモの泳ぎだけ見えた」

Vep.　sömad áni āi rebaže-ʌe händikka-mu teghe [KETTUEN 1943: 274]
狐　-all.　狼　-com.

「たいへんたくさんの食物が狼と狐にできた」

以上の例では，従格（具格）におかれた名詞は，意味上は完全に一方の斜格をとる名詞と等位に扱かわれていることがわかる。

また，ペルミ系のジリエーン語，ヴォチャーク語には，次のように，等位関係にある双方の名詞が，従格（具格）をとる例が多い。これは，最初に述べた一方だけが従格におかれた表現より一層，等位性を強調するため，従格接辞が同一要素として反復されたものと見做すことができるであろう。

Zir.　Вый-öн -нянь-öн сёйи-юи. [KARELSON 1958: 208]
バタ-instr.　パン-instr.

「私はバターやパンを飲み食いした。」

Voty.　ta-berɛ vumurt-en gondîr-en l'uko śȧrťśîzes. [LEWY 1911: 25]
水男-instr.　熊-instr.

「水男と熊は今，彼らの人参を分け合う。」

このタイプの等位表現は，文等位ではなく句等位から派生してきたものらしいことは，すでに述べた。このことは，このタイプの表現が，しばしば同時性，共同性を強

30) これと同様に，従格表現と等位詞を用いた等位表現との混淆により，従格表現において，単数の主語が複数述語をとる例は，印欧語においても知られている [BRUGMANN and DELBRÜCK II 1906: 462, V 1900: 255]。

調するため，together ‘一緒に’ に当る副詞を任意的に加えることからも支持されると思う。すなわち，第II章において，英語の例をとって示したように，句等位から派生した等位文は，任意的に together をとってパラフレーズを造り得た。これと同様に，together に当る副詞を加え得る等位表現は句等位を深層構造に持つといえるのではないか。

Vog.　ā̈mp-nā̈t　mə̆šäχ　ṷ̆ᵢkṷ̆ì'n　ā̈·　aʌà:ntặt [LIIMOLA　1963: 120]
　　犬-com.　猫　一緒に

「犬と猫は一緒に住まない。」

Voty.　Darja-en　Marja-en　vatše　śin uśkozy. [WIEDEMANN　1884: 230]
　　-instr.　-instr.　相互に

「Darja Marja は相互に見合った。」

Che.　mə̆i̯　tut-te·n　pərl'ặ·　kaı̯ná·. [WICHMANN　1978: 235]
　　私　彼-com.　一緒に

「私と彼は一緒に行った。」

Lap.　ko　toh　Vuollī-in　ohtan　moonàáin. [BARTENS　1972: 69]
　　彼　-com.　一緒に

「彼が Vuolli と一緒に行った時。」

また，前の節で述べたように一方の名詞に従格を用いた等位表現の場合，主格として現れる一方が人称代名詞の時は，双数，複数をとることがあった。(A-du. B-com.) しかし，次の例では主語は普通名詞であるにもかかわらず双数形をとっている。

Ye. Sa.　Оласнэ-хи'　онай нэ' но'　бирєбихи' [TERESHCHENKO　1973: 19]
　　魔女 du.　女 -com.　(du.)

「魔女と女が住んでいた。」

ここで「魔女」という名詞は双数で現れているが，述語が双数であることからも，「一人の魔女と一人の女」であると考えられる。これは，等位表現として，前節第IV章 3. で述べた数要素を用いるタイプと，この節で検討した従格を用いるタイプの両者の特性をもつものである。

最後に，ここまで見てきたような従格の機能をもつ要素は，しばしば，それぞれの言語で他の要素と共通点をもつことに触れておきたい。一般に，従格に用いられる要素は非常に種類が多く，そのうちのいくつかは歴史的にも浅いものであるが，一般的に言って，それらは同起源の副詞と強い繋りをもっていると言える。エストニア語の -ga は，副詞 ka「～も」と同起源であるが，元来は kansa「人々」から派生した「一緒に」の意味をもつ副詞であったらしい。同様に，ヴェプシャの -mu は同形

の副詞「一緒に」，カレリア語の -ke も副詞 kera「一緒に」と起源を同じくしている。また，オスチャークの従格的後置詞 pil-na は，pil ‘仲間’+n (所格)>「仲間となって」>「一緒に」を経て後置詞になったものと考えられる。更にラップ語の複数の従格群 -guim は，guoi'bme「仲間」に，ユラックサモイエード語の従格辞 ńa も同形の名詞 ńā「仲間」に起源をもち，上と同様に，「仲間として」>「一緒に」を経たものと推測できよう。したがって，このことからも，従格を用いる等位表現は，二名詞間の同時性，同伴性を内包するものであったといえるのではないか。

5. 具備形容詞派生接辞を用いるタイプ

ここで検討しようとする具備形容詞 (Nomen possessoris) 接辞を用いる等位表現は，文法的従属関係を転用するという点で，第4節の従格を用いる場合と共通している。4. では，従格をもつ名詞は述語に対して従属する副詞句を形成したが，この具備形容詞は，一般に名詞に従属する形容詞句を形成する。この派生接辞は本来，「～で装備された」「～をもった」「～つきの」という意味の形容詞を造る。まず派生接辞としての本来の用法をあげる。

Che.　latkok roža-n toj-kuraj-et　[Paasonen　1939: 113]
　　12　穴-pos. 真鍮の箱 2.sg.

「おまえには12穴のついた真鍮の箱がある。」

Ost.　tānt-əŋ ās jūχət jiŋ'k [Steinitz　1975: 374]
　　穀物-pos. オビ

「恵多きオビ川の水辺」

つまり，この接辞のついた名詞 A が，あとに来る名詞 B に対して，形容詞として修飾するわけで，被修飾語となる名詞は，文法的には，先行する形容詞句を支配する。

このような文法的従属—支配関係を等位表現に用いようとする例は，いくつかのウラル系諸語に見られ，記録されているが，前節の従格を用いる場合に比べ非常に少いといえる。むしろ，ペルミ系を除き，他の言語では一時的，偶発的なものか，二名詞間に特別な意味関係がある場合に限られているように思える。いわば萌芽的段階の域を越えることができなかったとすべきかも知れない。過去の研究で，等位表現として扱かわれているものを次に示す。(A-pos. B)

Yu. Sa. ṣ̌īβχōββᵝ jāl'l'e, piṣ̌-ṣuβäe̯i jāl'l'e tạňńe jūs̆s̆iδā [Lehtisalo　1947: 203]
　　夜-pos.　日

「更に7日夜と昼彼はそこで横になった。」

Os. Sa. endä-l tesse oralʒalʒid [SEBESTYEN 1958: 20]
弓-pos. 矢

「(彼女は) 弓と矢を与えた。」

Ost. még-ěŋ jinket iga [FOKOS-FUCHS 1962: 104]
陸-pos. 水

「陸と水の君主」

Vog. sāt ēt-iŋ χ̊ātəl lap tártaχtäst [FOKOS-FUCHS 1962]
7 夜-pos. 日

「7昼夜彼は隠れた。」

Zir. ńęj-a vudž [BÁTORI 1969: 14]
矢-pos. 弓

「矢と弓」

lun-a voi [BÁTORI 1969: 14]
日-pos. 夜

「日と夜」

Voty. ńun-o vin [BÁTORI 1969: 14]
兄-pos. 弟

「兄と弟」

以上のように，この表現に現れる名詞には，土一水，昼一夜，弓一矢，兄一弟のように相互に隣接関係にあるものの組み合せが多いのは興味深い。

ところで，ここで考えられることは，具備形容詞接辞を用いた等位表現が可能なのは，(少なくとも，その初期の発達段階においては)深層構造において，句等位を成していたためではないかということである。つまり，句等位におかれる二名詞は，述語動詞の示す行為に対して，互いに同時的，同伴的関係を内包していると考えられる。はじめに具備形容詞としての本来の用法を示したとおり，これが名詞の修飾語として用いられる場合，文法的にはもちろん，意味的側面からも，この派生接辞のついた名詞は被修飾語である名詞に対して，付随的，受身的存在であった。しかし，一方では，同時的，同伴的要素をもっていることも事実である。筆者は，従格が等位表現に用いられたのと同じように，具備形容詞接辞の場合も，この同時性・同伴性という意味上の共通性を接点として，句等位表現に転用されたと推測する。等位関係を表す有効な手段を持たなかった段階においては，このように本来は別の機能をもつ要素を他に転用することは充分あり得たと思われる。その際両者間の差異は大して問題にならなかったと想像できる[31]。

31) このような具備形容詞派生接辞を用いた等位表現に関して，双数であったことの残存によるものであるという説，強意の小詞であるとする説などがある [PENTTILÄ 1924: 191–195]。

さて，このような方法を生産性のある等位表現に発展させたのはジリエーン語である。ここで特記すべきことは，ほとんどの表現において，派生接辞は両方の名詞に現れることである。この理由としては，同一要素として反復することにより等位性を強調しようとしたためか，あるいは，紛れやすい，単なる修飾語としての用法と区別するためか，いずれかであろう。(A-pos. B-pos.)

Zir.　e(d'źęs mędaras ťśoj-a vok-a kutas śeravni. [PENTTILÄ 1924: 191]
妹-pos. 兄-pos.

「戸のうしろで妹と兄が笑いはじめた。」

ťśęrs-a tupiǰ'-a-ęs ńiǰišti. [PENTTILÄ 1924: 192]
糸車-pos. 糸だま-pos.-acc.

「私は糸車と糸だまをたたいた。」

kujim lun-a-voj-a kuili [FOKOS-FUCHS 1962: 104]
日-pos. 夜-pos.

「私は3日3晩，横になった。」

以上見てきたように，具備形容詞は名詞の従格（具格）と共通する性格を有していることがわかる。さらに次の事実も，これを支持していると考えられる。ウラル系諸語では，品詞間の転用がしばしば起るが，具備形容詞が副詞化し，従格（具格）的に用いられることが多い。Ravila は，具備形容詞が本来の被修飾語である名詞のあとに移動することにより，副詞化が始まると言う [RAVILA 1941: 44]。

Zir.　siǰi panid loi kuṕeťś tęvar-dod'd'-a [RAVILA 1941: 44]
商人　荷橇　-pos.

「彼に向って商人が荷橇とともにやって来た。」

さて，以上第Ⅳ章4. と5. で検討した等位表現は，基本的には句等位を表すものであったと推測できるのに対し，次に扱う二つのタイプはどちらかと言えば，文等位に傾斜していると考えられる。

6. 附加・強意の後接辞を用いるタイプ

ウラル諸語には，語を強調したり，追加的 (augumentative) 意味（「～も」）を与える際には，後接辞 (enclitic particle) を用いる表現が多いことは，先に第Ⅲ章で述べた。いくつかの言語では，この後接辞を用いて等位表現を行なうことがある。まず，語に強意や追加的を加える本来の用法を例示する。

Ost.　kat-pə wət'kəliɣən [GULYA 1966: 95]
家-aug.

「家も焼け落ちてしまった。」

Vog.　ti šäṭèl iń-pèl ạlą̣ntēt. [LIIMOLA　1963: 103]
今-aug.

「彼らはこの富で今も暮している。」

Hun.　Maria is tanuló.
aug.

「マリアも学生だ。」

Che.　kotšisum-at stel ympak šintēnam. [LEWY　1922: 73]
食事　aug.

「食物もテーブルの上に用意した。」

Mor.　i dumaśt pop dị d'ijakon-gak mol'ńe. [PAASONEN　1941: 308]
執事　-aug.

「そして，牧師と執事も行こうと思った。」

Fin.　Minä-kin tulen.
私　aug.

「私も行く。」

上の例で明らかなように，この後接辞は，先行する同様の表現，あるいは文脈を前提にし，それへの追加を示すものとして用いられている。

さて，実際にこの後接辞を用いた等位表現では，次のように等位におかれる二名詞双方に後接されることが多い。

Ost.　tú túnet, tú χutedat in-pa ūttet, taŋa-pa ūttet.　[LIIMOLA
今 aug.　後　aug.
1963: 103]

「この富とこの幸で今も後も暮す。」

Vog.　åńśuh-pel ńoåren, eekwe-pel ńoåren [COLLINDER　1969: 338]
老人-aug.　老女-aug.

「老人も裸になった。老女も裸になった。」

Hun.　Az atléták is, a labdarúgók is szerepelnek ma. [BANHIDI-JOKAY-
陸上選手　aug.　フットボール選手aug.
SZABÓ　1964: 355]

「今日は陸上選手もフットボール選手も見ることができる。」

Che.　pogenet tsyl'awl'am, mazar monet, chudawl'am-at purawl'am-at
悪いもの　aug.　良いもの　aug.
[WIEDEMANN　1847: 52]

「彼らは悪いものも良いものもできるだけ多くあつめた。」

Mor.　mon-gak ton-gak
私-aug.　あなた-aug.

「私もあなたも」

Fin.　talavella-k kesällä-k kun sitä kulettiin. [PULKKINEN 1966a: 66]
　　冬に-aug. 夏に-aug.

「冬にも夏にもそこを通ったものだが」

これらは，すべて二つの独立した文に言い替えることができる。たとえば，ハンガリー語の例文は，次のようになる。

Hun.　Az atléták szerepelnek ma.　A lubdarúgók szerepelnek ma.
　　陸上選手　　フットボール選手

したがって，このような強意・追加の後接辞を用いる等位は，二文の追加的接続の形式に文等位が投影されたものと見ることはできないであろうか。つまり，一つの名詞のみが異なり，相互に等位関係にある二文を，一つのまとまりのある表現に縮約するために，本来，追加の意味をもつ後接辞が用いられたと見做せよう。ところが，等位表現として，この後接辞が用いられる場合，例で見たとおり，ほとんどの場合，双方の名詞に現れるのが普通で，「～も～も」という様に，単なる等位以上に等位性が強調されているようである[32)]。

一方，次の例のように，後の文の当該名詞にのみ，後接辞が用いられる場合は，二文の並置に比べ，二つの命題は緊密に結ばれているとはいえ，純粋な等位関係にあるのか，後者は単なる追加かは断定しにくい。

Ost.　joget en taidam, not-pa en taidam. [PATKANOV 1911: 169]
　　弓　　矢-aug.

「私は弓を持たない。また矢さえ持たない。」

Vog.　ton mojiŋ åńśuh wonli pel loåtti.[33)] [COLLINDER 1969: 336]
　　座った aug. 言った

「老いた客は座って言った。」

Hun.　eltelt az első nap, eltelt a második is. [SZINNYEI 1950: 95]
　　第1日　　第2　aug.

「第1日が過ぎた，そして2日目も過ぎた。」

次のフィン語の例では，後接辞は後者の名詞にのみ現れている。

32) Pulkkinen [1966a] は，フィン語の後接詞 -kin を反復させる等位表現が，東部を中心に独自の発達を遂げ，慣用句として品詞を問わず残っていることを指摘している。しかし同時に，この現象は他のウラル系諸語でも大なり小なり見られるウラル的等位表現と見ている。

33) ヴォグール語の pel は動詞につくと，日本語の接続助詞「と」と非常に似た性格を示す。「と」は動詞連体形について，文を続ける働きがあるが，単なる等位接続の他，条件，時間的配列など，いくつかの関係を含意する。

朝起きると，顔を洗う。

寒いとすぐ風邪をひく。

Fin.　Miehen ja hevosen ystävyys on muistettava kotosalla, maantiellä,
家で　路上で
metsässä-kin. [PULKKINEN 1966b: 169]
森で　aug.
「人と馬の友情は家や路上や森の中でも思い出すべきだ。」
suomensi ja mukaili lyriikkaa, näytelmää-kin. [PULKKINEN
叙情詩　戯曲　-aug.
1966b: 169]
「叙情詩やそしてまた戯曲をフィン訳し脚色した。」

これらの例では，やはり純粋な等位というより，強意や追加の要素が濃いといえよう。

それに対し次の例に見られるチェレミシ語の場合は，'一緒' にを意味する pirla と共に，句等位として用いられている。

Che.　tuδ-àt miń-àt pirla̯· kaiṇà. [WICHMANN 1978: 234]
彼-aug.　私-aug.　一緒に
「彼と私は一緒に行く。」

しかし，もし，この追加の後接辞が基本的に文等位に近い関係を表現するという仮設が正しければ，この例とは矛盾することになる。つまり，第II章で見たとうり，'一緒に' という副詞は句等位には加わり得ても，文等位とは相入れない。他言語のこれに対応する後接辞の場合からみても，上の例にあるような表現は極めて例外的といえるであろう。

7. 独立小辞的等位詞を用いるタイプ

6. で扱ったタイプがどちらかというと，常に語に後置される小辞であったのに対し，ここで検討する要素は，語として自律性をもつものである。ただし，外国語からの借用語は，次の節で検討する。まず，等位表現としての例をあげてみる。(A co B)

Yu. Sa.　Миша няби Ваня тоходанванзь хаяха'. [TERESHCHENKO 1973: 16]
co.
「ミーシャとウァーニャは学びに行った。」

Ta. Sa.　Сундайчӱдя дяӈур'' нині ӈунӱнтэгэтуму'' ӈузай ӈонэ бахизяй
草の実　co.　きのこ
[TERESHCHENKO 1973: 18]
「秋には，ツンドラで草の実やきのこを集めます。」

Os. Sa.　äsam ai äman kuess. [CASTRÉN and LEHTISALO 1960: 243]
父　co.　母
「父と母は行った。」

Ost.　jēməŋ ńol pā wɔš l̥ū̆χ χojn̥ śańa jɔ́χn̥ at ū̆jətlajtn̥?[34]　[STEINITZ 1975: 53]
聖なる岬　co.

「śańa の住人で聖なる岬と wɔsluχ を知らぬものはいようか。」

Vog.　iätər iò tòkχ tə säβtò̯å. [KANNISTO 1951: 30]
雌鶏　co.　雄鶏

「雌鶏と雄鶏が今，芽をついばんでいる。」

кит вас ос аквв　сёпыр аласув. [ROMBANDEJEVA 1954: u]
かも　co.　かましぎ

「カモとかましぎ2匹だけ行った。」

Hun.　Az apa és az anya már konyhában van.
父　co.　母

「父と母は台所にいる。」

volt egyszer egy öreg ember meg egy öreg asszony. [SZINNYEI 1950: 95]
老いた　人　co.　老いた　女

「あるとき老人と老婆がいた。」

Fin.　hankkia raaka- ja käyttöaineita sekä työvälineitä [NSS: sekä]
原料　消耗材　co.　道具

「原料，消耗材および道具の調達」

siitä on hyötyä että huvia [NSS: että]
益　co.　たのしみ

「それには実益とたのしみがある。」

minä hävitän heidät ynnä maan. [NSS: ynnä]
彼ら　co.　地

「私は彼らと地を滅亡させる。」

Est.　Taevas ning maa kaovad kord. [KETTUNEN 1971: 72]
天　co.　地

「天と地は一度滅亡する。」

こうしてみると，固有の要素から造った独立小辞としての等位詞，あるいはそれに近いものを発達させているのは，サモイェード諸語，ウゴル系，およびバルトフィン系諸語であると言える。ところが，これら諸言語で，上に用いられている小辞は，純粋な等位詞の機能だけではなく，むしろ副詞的性格を大なり小なり備えている。特に，

34) この pa は，第6節の後接辞 -pa と同じ要素であると思われるが，この場合は語から分離して記録されている。その他，この語は，次に考察するロシア語からの等位詞 i と，同じ環境に現れるため，ここで自律語として扱うことにする。

サモイェード諸語，ウゴル系では顕著であるように思える。まず，これら諸語における副詞的用法を見ることにする。

Yu. Sa. ńēʙ˓eδp̣ ŋ̀ń̀i'' tum'' jīṣīδa̧.[35] [CASTRÉN-LEHTISALO 1960: 403]
再び

「彼の母は再び火をつけた。」

Os. Sa. aunide ai‿gepajek [CASTRÉN 1855: 169]
もっと　小さい

「他はもっと小さい。」

taŋit aj ni tulimin [ERDÉLYI 1970: aj]
また

「夏にはまた，ここへ来ます。」

Vog. tạriǰiβsụʙ kà''sail ōs ta tūštəste. [KANNISTO 1951: 244]
再び

「彼女は今，再び刀を松の幹に打ち込んだ。」

ià χōt ōli sạ̀r. [KANNISTO 1951: 145]
さあ

「さあ，彼はどこにいるんだ。」

Hun. Tavaly itt volt, s az idén is eljön. [BENKŐ-IMRE 1972: 136]
も

「去年，彼はここにいた。そして今も来るだろう。」

En orvos vagyok, ö meg mérnök. [BÁNHIDI-JÓKAI-SZABÓ 1964: 74]
また

「私は医者で，一方かれは技師です。」

これらの副詞にほぼ共通していえることは'さらに'，'ふたたび'，'また'，のように追加的意味を文に与えていることである。そして，内容的に関連のある文，あるいは文脈が先行していることを前提としているように思える。次に，このような副詞的小辞が文，あるいは動詞句のはじめに来ている例をあげる。ここでは，これら副詞的小辞が，追加的副詞の延長として，明らかに先行する文や文脈にさらに新しい文などを接続している。

Yu. Sa. βāŕe''èn ṅà''māβ, āńi' χàŕiṣeťtiβδæ, ā̀ńi' ǎèδarāṣtīβδæ[35].
まず　　それから

[CASTRÉN and LEHTISALO 1960: 365]

「やっとつかまえて，まずおどかして，それから走らせた。」

35) Yu. Sa. ŋàńi'', āńi' は Ta. Sa. の ʜонэ に当る。

Os. Sa. nyyny aj tå pɛläl′ kupaktysä qättyŋyt- aj tyy orqylnyty.
また

[COLLINDER 1969: 476]

「彼は再びこぶしでなぐった。するとそれはまたこぶしをつかんだ。」

Vog. kβā·labs, ō·s ta mi`nạs [KANNISTO 1951: 142]
また

「彼は立ち上り，また行ってしまった。」

ịà taịitēD ạń ta šỳni. [KANNISTO 1951: 141]
そして

「そして，今も裕福に暮している。」

Hun. És hirtelen szélvihar csapott le a tóra. [COLLINDER 1969: 407]
そして

「そして突然湖に風が吹いてきた。」

これらの例では，単に文が接続されているだけで，先行する文との論理的関係（単なる時間軸に従う叙述，因果性，結果など）は文脈に委ねられるものである。ところが次の例では，二つの文は，ほとんど等位の関係にあると考えられる。

Os. Sa. äsam kues ai äma kues. [CASTRÉN and LEHTISALO 1960: 243]
父　co.　母

「父は行った。そして母は行った。」

恐らく，このような等位関係にある二文を接続する際用いられた副詞が，次第に追加性や二文間の主従性を排除しながら等位詞として発達したものと考えられる。

この副詞から等位詞への発達の段階を示す例として，オスチャーク語の us をあげることができる。これは，上で等位詞として見たヴォグール語の os と起源を同じくする語であるが，ヴォグール語に比べオスチャーク語では完全に等位詞としては発達しきっていないように思える。次の例では，'また'，'再び'，'さらに' という意味の追加性が強く，等位詞の域には入らない。

Ost. kimeta us nāvermōt. [PATKANOV 1911: 128]
再び

「2回目，彼は再び跳んだ。」

kat ēva taidam, us en taidam. [PATKANOV 1911: 128]
更に

「娘を2人もっている（が），それ以上もたぬ。」

オスチャーク語では，これを補うように，前節でみた後接辞 -pa と同じ要素が，自律語として独立し，副詞としての他，等位詞として機能している[34]。

副詞として：pā　śi jelli manti pitsət [STEINITZ　1975: 153]
もっと

「彼は再びもっと遠くへ行きはじめた。」

動詞の接続：lil pà　χòi̯l [STEINITZ　1980: pa]
そして

「(彼女は) 食べて，寝た。」

名詞の等位：aj pĭlip pŏχ pa t'ɔt'i poχ [STEINITZ　1980: pa]
co.

「小フィリップの息子と t'ɔt'i の息子」

ところで，ここで自律語として副詞や等位詞として用いられている pa と，前節第Ⅳ章 6. で検討した後接辞 -pa との関係について考えてみたい。一つの可能性として，後接辞としての -pa が語幹から分離独立したものであるということも考えられようが，筆者は必ずしも，そうだとは思わない。一般に，自律語が意味的，音韻的に独立性を失い他の語の接辞に転落することはよくあるが．逆は起りにくい。また，一方で，オスチャーク語には，'他の'，'別の' という意味の同起源の形態素があり，代名詞あるいは接頭辞的に用いられている。

pako məɣ 「外国」，

pa..., pa... 「あるものは～，あるものは～」 [STEINITZ　1980: pa]

pà-mon 「外国」 [LEWY　1911: 12]

筆者は，おそらくこのような品詞的に未分化の形態素が，一方は後接辞になり，一方は副詞として独立し，さらに等位詞に発達したと推測する。サモイェード諸語の等位詞 ӈонэ, няби なども同様に，'他の' '別の' を意味する不定代名詞* ånэ に遡るといわれる [JANHUNEN　1977: 18]。

これと同様のことは，ハンガリー語の等位詞 és が，具備形容詞派生接辞 -es から自律語化したものであるという説 [RAVILA　1941: 43; BENKŐ and IMRE　1972: 135 など] に関しても言えるであろう。この説によると，現在でも生産的に用いられる具備形容詞派生接辞が，第5節で見たように，まず一方の名詞の従属性を示す段階から等位性を示す段階に発展する。その後，派生接辞は語幹から独立して，純粋な等位詞となったという。すなわち，次のような発達をしたことになる。

férj-ēs feleség 「夫をもつ妻」>「夫と妻」>férj és feleség 「夫と妻」
夫-pos.　妻　　夫-co.　妻

この仮定の過程はいかにも説得力があるように思えるが，自律性のない派生接辞が，強勢が移ったにしろ，自律語として独立するには少し無理があるように思える。何よ

りも，és が独立するまでに経過したはずの階程を示す，férj-és feleség が「夫と妻」を表すということはないように思う。

やはり，この場合も，pa と同様に派生接辞，等位詞などと分離する前の語あるいは形態素に遡ることができるのではないだろうか。és の副詞的用法として，前節で考察した後置的副詞 is「～も」の例を挙げたが，この is も上の és や -és と同じ起源をもつという考えからである。

これと近い説は，Lakó [1971: 326, 327] によってもとられ，もとは *és で'自分'を意味し，強意の語として用いられたと推則されている。

バルトフィン諸語の中で，自律的等位詞として用いられているのは，フィン語の että, ynnä, sekä, エストニア語の ning, および，他言語でこれらと同起源の語である。やはり，これらも，大なり小なり，追加の副詞としての起源をもつようであり，基本的にはサモイエードやウゴル諸語と同様に文等位を表現するものであろう。

että は等位詞として，単独で用いられることはまれであるが，sekä とともに，相関接続詞として用いられる。

sekä mies että hänen hevosensa hukkuivat.
co. 男 co. 彼の 馬

「男も彼の馬も溺れた。」

Hakulinen は että の等位詞としての機能は，元来，代名詞 e- を語幹とする副詞から派生してきたもので，'そのように'，'同様に'と意味したとする [Hakulinen 1968: 64]。したがって，追加的に，語を接続させる副詞であったと考えられよう。

sekä は，次節で考察する外来の接続詞 ja による等位がくり返される際，最後の語の接続に用いられることが多い。

kuusen ohella kasvaa, koivua, haapaa ja leppää sekä muita lehtipuita
白樺 やまならし かわらはんのき co. 他の広葉樹

[Weingard-Teräväinen 1981: 484]

「とうひの他に，白樺，やまならし，かわらはんのき，その他広葉樹が育つ。」

この語は se+kä から成っている [Hakulinen 1968: 65]。se は指示代名詞で，-kä は強意の後接辞である。

sekä と似た用法をもつのが，エストニア語の ning で，ja による等位に更に語を加える際用いられることが多い [Kettunen 1971: 72]。

kohati jõgede orgudes leiduvad salukuusikud ja lammimetsad ning
白樺林 co. 湿林 co.

paepealsed lookuusikud [Kodumaa 26. 1. 1983]
スレート色の 低い白樺林

「ところどころ川岸には白樺林や湿林やスレート色の低い白樺林がある。」

この ning は nīn kuin (so as にほぼ相当) からきたものとされるが，nīn は‘それ’という指示代名詞の具格形副詞である。これもやはり‘同じように’という意味で追加的に語を接続させていたのではないだろうか。

フィン語の ynnä も，上の二つと同様に，二つ以上の語の等位において，最後の語を接続する際に多く用いられる。

korkeasaaressa nähtiin karhuja, leijonia, apinoita ynnä monia muita
熊　ライオン　猿　co.　他の多くの
outoja eläimiä [NSS: ynnä]
珍しい動物

「コルケアサーリで熊やライオンや猿やその他多くの珍しい動物を見た。」

副詞としては，‘一緒に’‘また’‘加えて’の意味で用いられる。

Lain ja viisauden työt ovat ynnä tarpeellisia. [NSS: yunä]
co.

「法と知の仕事もまた必要である。」

この語は，*üktnä ‘一つになって’に起源をもち，元来‘一緒に’という意味の副詞であったとされている [Hakulinen 1968: 65, 310]。

Niin Pietar ja Johannes menivät ynnä ylös. [NSS: ynnä]
co.

「そうしてピエタルとヨハネスは一緒に登った。」

起源からも推測されるように，ynnä は，他の追加的副詞から発達したと考えられる sekä, että, ning などと異なり，等位関係におかれる名詞は同類，あるいは同伴関係にあるものを前提とするということが指摘されている。

全体の傾向として，バルトフィン語の等位詞は二語の等位表現には，あまり用いられないように見える。また，文や句の等位にも用法に制限があるようで，サモイェード諸語，ウゴル諸語の等位詞に比べ，等位詞としての生産性は低いといえる。

この節では，独立した自律語として，純粋な等位詞に近い機能をもつものについて考えた。これらの多くは前節の後接詞と同様に追加の副詞に起源をもつように思われるが，異なる点は，前置的性格が強いということである。つまり，等位関係におかれる二語 A, B があった場合は，後接辞による表現では A B-aug. または A-aug. B であったのに対し，等位詞の場合は A co.‿B に近いと思われる。これは，等位詞が相関等位として用いられる際に顕著である。co.‿A co.‿B

また，このような追加の副詞を形成する要素は，諸語を通じて共通しているように

思える。これに関して，Ahlman は興味深い指摘をしている。つまり，等位接続詞は副詞から発達することが多いが，これらはしばしば anaphoric な要素を含んでいるという [Ahlman 1938: 36]。この説は，事実，上で考察した että, sekä, ning が‘それ’に当る指示代名詞を語根としていることと合致している[36]。また，サモイエード諸語やウゴル諸語のように‘別の’という不定代名詞を用いる場合の多いことも注目すべきであろう。各言語にはこれらの他，単に文を接続するだけの機能をもつ副詞はいくつか存在する。文を接続する機能をもつ副詞は一般に等位（接続）詞と区別して，結合子 (linking word, conjunct, connective) などと呼ばれている。しかし，上で見てきたように，等位詞との厳密な区別は困難である。なぜなら，この両者の違いは，単に追加的に語を接続させている段階と，追加性や二語間の主従性を排除しきった段階との間の程度の差にしかすぎないからである。

さて，以上はすべて，ウラル系諸語が，等位詞をもたない段階で，等位関係を，既存の要素を用いて迂曲的に表現してきたものである。しかし，明らかになったように，それぞれの表現法は，何らかの意味で，二つある等位関係の一方に傾斜していたり，二名詞間の意味的関連性を前提とする場合があり，純粋な等位詞としての機能を持つものは非常に少なかったといえよう。

8. 借用語に起源をもつ等位詞を用いるタイプ

現在，ウラル諸語には，周囲の印欧系言語から実に多くの接続詞がとり入れられている。Schlachter によると，ここで対象としている連結等位接続詞の他，逆接等位，選択等位など自律語としての等位接続詞と呼ばれているもののうち，ジリエーン語が18中16—17，ヴォチャーク語が15中11，モルドヴィン語とチェレミシ語ではすべてがロシア語からの借用によって占められているという [Schlachter 1973: 212]。ロシア語の借用語（da, i, no など）は，これらの他にも，サモイェード諸語，オビウゴル諸語やバルトフィン系の中でも特にロシアと関係の深かったカレリア，ヴェプシァ，ヴォート，リュード語やラップ語東部方言などに多く見られる。また，バルトフィン諸語やラップ語では，最も基本的な等位詞（フィン語，エストニア語などの ja<*jah）はゲルマン語からの借用語である[37]。この他，リーヴ語はラトビア語の影

36) 印欧語の接続詞の多くも同様の起源をもつことが指摘されている。ラテン語，et，ゴート語 iþ ‘dazu’ [Brugmann and Delbrück IV 1897: 516]。

37) 但し，この jah は現在ゲルマン諸語では等位詞として用いられていない。興味深いことに，jah は Hirt [1934: 192] によると，*jo ‘der’+*kʷe ‘und da’ に起源をもつとされているが，-kʷe は第7節で扱った後接辞と同じく，強意を示す古い印欧語の要素である。したがって，全体としては，第8節で考察したフィン語の等位詞 se-kä と全く同じ構成になる。

響が強く，等位詞 un を借用している。

ここでは，連結等位詞のみに限って例をあげる。

Yu. Sa. Вэсако та пухуця ёрманзь пяди′ [Tereshchenko 1973: 17]
老人 co. 老婆

「老人と老婆が魚を穫りに出かけた。」

Ost. jēməŋ ńol i wɔš lūχa kāšəŋ tow śạńa jɔχ pōriliti jirasti χōjlilət[38].
聖なる岬 co.

[Steinitz 1975: 53]

「聖なる岬と wɔsluχ に毎春 sana の住人は供物と犠牲を捧げにやって来る。」

Vog. χårm-jā̄ i jäχ-jā̄ mā̄now tittijā̄tən. [Kálmán 1965: 92]
co.

「χårm 川と jäχ 川は我々を養ってくれる。」

Zir. kor-kę kejin da oš etlaaśasni. [Uotila 1938: 11]
狼 co. 熊

「狼と熊は呼びあって出会った。」

Voty. liktem mumizńɛ no ajizńɛ [Wichmann 1954: 136]
父の方へ co. 母の方へ

「(彼女は) 父と母の方へやって来た。」

Che. tùδo δa miń βélə̂ ilnậ. [Wichmann 1978: 235]
あなた co. 私

「あなたと私だけがいた。」

Mor. a buka ventindē pil′k i pŕa. [Collinder 1969: 239]
足 co. 頭

「しかし，雄牛は自分の足と頭を伸した。」

Lap. go læk riidok dalulâǯǯai jâ samii gâskâst [Collinder 1969: 216]
農民 co. ラップ人

「農民とラップ人の間に争いがおこると。」

Fin. minä ja sinä olemme ystäviä.
私 co. あなた

「私とあなたは友人だ。」

Kar. še oli olluv vielä meččänä Laurosen ta mäev väli. [Virtaranta 1967: 12]
co. 丘

「まだ，Lauronen と丘の間は森だった。」

38) 第7節では，同じ句に，オスチャーク語固有の等位詞 pa が用いられていた (472頁)。

Vep.　ukoʌę kagr　i　końd'ī jäi. [VIRTARANTA　1967: 113]
　　カラス麦 co. 熊

「おやじにはカラス麦と熊が残った。」

これら借用による等位詞は上の例にあるような名詞だけの等位にとどまらず，文，節，句などの接続にも用いられている[39]。

次の例では，相関接続詞として用いられているが，ロシア語の場合と同様に，等位関係にある二要素それぞれの前に置かれている。

Zir.　H　TƏ　H　MƏ
　　co. あなたたち co. 私たち

「あなたたちも私たちも」

Vep.　oʌud häi̯ktub i　botškha i　ataʌutśha.　[KETTUNEN　1943: 552]
　　co. 樽-ill. co. 木のコップ-ill.

「ビールが樽や木のコップにしみつく。」

ところが一方では，これら外来の要素も，ウラル諸語固有の等位表現と非常に類似した性格を呈することがある。

たとえば，二語の等位に用いられた場合，この節の最初の例で見たとうり，A co. B として現われており，一見したところ，元の与えた例の言語と変りはない。しかし，しばしば，これら外来の等位詞も，前の名詞に付く後接辞のような現れ方をする。まず，音韻的に，先行する名詞のアクセント圏に属して続けて発音され，ポーズはむしろ後続の語の前におかれる場合がある。(A‿co. B)

Voty.　Marjän-no Darijän vačä śin učḳisa ulo. [FOKOS-FUCHS　1961: 285]
　　co.

「Marijä と Darijä は互いに似ている。」

Kar.　ta šielt ol šiltoa müöt'i tullun šoarelta läksütellün‿tä sarajaŋ külellä
　　そして　島から　走りながら　やってきた co.　乾草小倉の

moannun üötä[40] [VIRTARANTA　1967: 12]
　　そばで一晩ねた

「そして島から橋を渡ってゆっくり走りながらやってきて，乾草小倉のそばで一晩ねた。」

39) モルドヴィンのように，名詞の等位に複数要素の反復する表現 (A-pl. B-pl.) などが広く用いられる場合には，借用語の i は，むしろ動詞句や文の接続に用いられるという具合に，相補的に分担し合っている言語もある。

40) ここでは，本来 tä の ä は後母音 a であるが，ここでは，ta は先行する動詞と同じく，前母音となっている。ta が動詞の後接辞と見做されたため，母音調和の原則に従ったものと考えられる。

Vote.　silmivarnikęd i　tsä·sivarnikęd [Fokos-Fuchs　1961: 279]
目の布　co.　手の布
「目の布と手の布」

Vep.　el'ībad ag‿da mužik. [Virtaranta　1967: 114]
女　co.　男
「女と男が住んでいた。」

さらに次のように相関接続詞として用いられる場合でも，二語それぞれの後に置かれることがあるが，完全にウラル的相関等位の形式をとっているといえる。(A‿co. B‿co.)

Zir.　olɛni da vilɛni da talun [Fokos-Fuchs　1951: da]
生きる　co.　居る　co.
「今日も生きており住んでいる。」

Voty.　so pęraśez no starikes no tṣ́ṓtṣ vumurt [Lewy　1911: 25]
女　co.　夫　co.
「女と夫は水男のところへ行った。」

次の例では no は後続の語に後接している。

Voty.　anaiezlen ataiezlen no [Lewy　1911: 25]
彼の母へ　彼の父へ　co.
「彼の母と父へ」

また，次の例のように，単独の語に後置され，強意，追加の副詞としてさえ用いられることがある。

Voty.　al'i-no tadko na. [Munkácsi　1986: no]
今　も
「今も私は知っている。」

Vep.　tervhuś kadō, ka kol'　i.　[Kettunen　1943: 537]
死んだ　emph.
「健康を害し，そうして死んでしまった。」

以上の点では，外来語の等位詞も，第6節で述べた後接詞と統辞的・意味的に完全に一致しているといえる。

その他にも，これらが，追加の副詞として用いられる場合がある。

Fin.　Mutta talon isännällä oli ja tyrät. [Rausmaa　1972: 276]
も
「しかし，家の主人にもヘルニアがあった。」

Vep.　minä roh'īn mända, minäi i　azeg om. [Kettunen　1943: 537]
さえ
「行くのは恐しくないさ。私には武器もあるんだから。」

最後のような用法は，ロシア語やゲルマン語においてもあるため，必ずしも借用さ

れて後の現象とも断定できないが，少なくとも固有の等位詞の影響はあったであろう。

以上のことから，借用語の等位詞は，一方では，二語間の純粋な等位関係を表す小辞としての性格をもっていると同時に，他方では，その現れ方（後接辞化，相関接続の際の後置）や意味・機能（強意や追加の副詞的用法）において，ウラル語的体系に組み込まれているとも言えよう。

V. 結　　論

ここまで，ウラル諸語における種々の等位表現について考察してきたが，一応全体として明らかになったことをまとめてみたい。

まず等位表現とは言っても，言語のあらゆる事象と深くかかわっているということが明らかになった。語の等位関係の表現のために，自律語としての等位詞を欠いていたウラル諸語では，それ故に音韻的，形態的，また統辞的手法を用いてきた。したがって，等位表現の手段を持たなかったということにはならない。上に見てきた等位表現の多様性は，等位関係におかれる語の品詞，文法的機能，および語間の意味的関係により，使い分けられてきたものであろう。

等位関係には大きく二種類あることを最初に述べたが，種々の表現のタイプを検討してみると，基本的には，どちらかに傾斜していることがわかった。

通時論的に見ると言語の発達の初期の段階においては，まず単文内の各語の統辞的機能関係を明らかにすることが要請される。そのような段階では，二文等位（すなわち，相似した二文中のそれぞれ一要素を等位関係に置き，一文に縮約すること）が句等位に優先されたとは，まず考えられない。おそらく Ravila の主張するように，二文はそのままの形で並置されたのであろう。

ところが句等位の場合は，もとから一文中に同じ機能を有する複数の語が存在し，それらは一つの求心的構造を形成している。これを二文で言い替えることはできない。二要素が等位関係にあることは，論理的には単純な構造であるといえるが，この二要素を，言語のもつ避けることができぬ，時間軸に従う配列，つまり，線的構造におきかえねばならぬことが，現象を複雑にする原因であったと考えられる。ウラル祖語のように，語順が語間の主従関係を規定していた場合はなおさらである。

最初に出現したと考えられる等位表現は，語をそのままの形で並置することである。これは，どの言語もまず試みることではないかと考えられ，大かれ少なかれ痕跡は残っている。しかし，これは，ウラル語では語順が語間の従一主関係を表すという原則

に逆うため，本来は等位とはとられないはずである。それにもかかわらず等位関係にあると見做されるためには，語間に特別な意味関係があり，またアクセント，ポーズなどの助けをかりて始めて可能であったと考えられる[41]。それでも，二語並置の多くは，現在，合成語として隔合してしまったものが多く，語そのままの並置が，等位表現としてプロダクティブに用いられている言語はないと言えよう。

代りにとられた方法は，本来の別の関係を示すための要素をもって，等位関係を迂曲的に表現することであった。これに採用された要素（従格接辞や具備形容詞派生接辞）は，同伴性，同時性という意味上の接点を句等位と共有していた。また一方，等位関係にある二語が，自然的に，あるいは，文脈上まとまったものとして見做されていた場合には，一方の語についた双数・複数・集合辞が他方をも含意した，一つのまとまりとして把握された。その際，他方は，従格などで補足されることもあったようである。

ウラル諸語の等位表現の歴史において，画期的な現象は，数，格，人称接辞などの形態素が，同一要素として二語に反復されると，等位関係にあると見做され始めたことであろう。この同一要素反復は，多様の形態素において行なわれたが，等位関係を示すためにのみ，元来等位表現とは関係のない人称接辞や格語尾を用いる場合もみられる。ただし，同一要素反復による等位表現が可能であったのは，ウラル系言語において，形態素が，原則として，それぞれ，一つの意味・機能との対応をなし，また異形間の違いが少かったことにも原因していると思われる。

これに対し，文等位は，基本的に，追加・強意を示す副詞が二文を結ぶことから始まったと推定する。これには，語に後接される後接辞，あるいは自律的小辞が用いられたが，後接辞がよりウラル的であったといえよう。そして，この要素により，二文が一文に縮約され始めると，次第に，二つの異なる等位構造に起源をもつ等位表現方法は，その間の厳密な区別を失っていったと思われる。こうして，ウラル系全体の傾向としては，後者のような自律的等位詞が，あらゆる等位関係の表現に用いられ始めているように思われる。とはいっても，これらの多くは，いまだ本来の副詞的機能を果すことが多い。この反面，外来の等位詞は，たとえ元の言語では副詞的性格をも兼ね備えていたとしても，それはほとんど払拭され，純粋な等位詞として採用されたのではないか。ただし，受け入れた言語自体にも，在来の等位法に代る外来の等位詞を受け入れるだけの言語体系的基盤がなければならない。印欧語の影響がその体系自体

41) 並置による等位表現の研究では，この点が見落されていたことを Itkonen, E. [1944: 242] は指摘している。

に及んでいたためか，言語の自然な体系変動か断言はできぬが，今後説明が要求されるところである。ハンガリー語の場合は，大きい体系的変動を遂げたにもかかわらず，外来要素ではなく，固有の要素が純粋な等位詞として発達した。その反面，オビウゴル諸語，ペルミ諸語などでは，外来の等位詞が逆に在来の等位表現への順応を見せているが，これは，これらの言語ではウラル語の基本的言語体系が，比較的よく保存されていることを示唆するものであろう。

Appendix　略記号

A, B	等位関係にある語	abl.	離　格
–x, –y	格・人称・数などの接辞	acc.	対　格
N	名　詞	all.	向　格
V	動　詞	car.	欠　格
Adj	形容詞	com.	従　格
1., 2., 3.	第一人称，二人称，三人称	elat.	出　格
sg.	単　数	gen.	属　格
du.	双　数	ill.	入　格
pl.	複　数	instr.	具　格
coll.	集合辞	lat.	方　格
aug.	追加・強意の後接辞	lok.	所　格
co.	等位詞	part.	部分格
dem.	指小辞	sep.	分離格
emph.	強意の後接辞	supr.	上　格
pos.	具備形容詞派生接辞	trans.	変　格
prep.	前置詞		

文　　献

AHLMAN, Erik

1938 Über Adverbien. *Studia Fennica* 3., Suomalaisen Kirjallisuuden Seura: 19–44.

AHLQVIST, August

1894 *Wogulische Sprachtexte nebst Einwurf einer wogulischen.* Mémoire de la Société Finno-Ourgienne (MSFOu) 7.

1981 *Wogulisches Wörterverzeichnis.* MSFOu 2.

BALANDIN, A. N. i Vakhpusheva, M. P. (Баландин, А. Н. и Вахпушева, М. П.)

1958 *Мансийско-русский словарь.* Ленинград.

BÁNHIDI-JÓKAI-SZABÓ

1964 *Learn Hungarian.* Akadémiai Kiadó.

BARTENS, Raija

1972 *Inarinlapin, merilapin ja luulajanlapin kaasussyntaksi.* MSFOu 148.

BÁTORI, Istvan

1969 *Wörtsusammensetzung und Stammforverbindung im Syrjänischen mit Berücksichtigung des Wotjakischen.* Ural-altaische Bibliothek 12. Otto Harrassowitz.

1980 *Russen und Finnugor.* Otto Harrassowitz.
BENKŐ, Loránd and Samu IMRE(ed.)
1972 *The Hungarian Language.* Akadémiai Kiadó.
BERGSLAND, Knut
1946 *Røros lappisk grammatik.* Oslo.
BOUDA, Karl
1933 Der Dual des Obugrischen mit einem Exkurs über die Suffixlockerheit. *Journal de la Société Finno-Ougrienne (JSFOu)* 47, 2.: 3–66.
BRUGMANN, Karl
1925 *Die Syntax des einfachen Satzes im Indogermanischen.* Berlin und Leipzig.
BRUGMANN, Karl und Berthold DELBRÜCK
1897–1916 *Grundriss der vergleichenden Grammatik der indo-germanischen Sprachen* I–V. Strassburg: Trübner.
CASTRÉN, Aleksander
1855 *Wörterverzeichniss aus den Samojedischen Sprachen; samojedisch-deutch, deutch-samojedisch.* Nordische Reisen und Forschungen. st. Petersburg.
1940 *Samojedische Volksdichtung.* MSFOu 82.
CASTRÉN A. und T. LEHTISALO
1960 *Samojedische Sprachmaterialien.* MSFOu 122.
CHOMSKY, Noam
1957 *Syntactic Structures.* Janua linguarum. The Hague: Mouton.
COLLINDER, Björn
1969 *Survey of the Uralic Languages.* Stockholm: Almqvist & Wiksell.
COMRIE, Bernard
1981 *The Languages of the Soviet Union.* Cambridge University Press.
DONNER, Kai
1944 *Kamassisches Wörterbuch nebst Sprachproben und Hauptzügen der Grammatik.* Helsinki.
DOUGHERTY, Ray C.
1970 A Grammer of Coördinate Conjoined Structures: I. *Language*, Vol. 46, No. 4: 850–898.
ERDÉLYI, Istvan
1970 *Selkupische Wörterverzeichnis.* Akadémiai kiadó.
FOKOS-FUCHS, D. R.
1959 *Syrjänisches Wörterbuch* I–II. Budapest.
1961 Über den Ursprung einer syrjänischen Konjunktion. *Acta Linguisticae Academiae Scientarum Hungaricae*, Tomus XI Fasc. 3–4: 273–299.
1962 *Rolle der Syntax in der Frage nach Sprachwissenschaft.* Ural-altaische Bibliothek 11. Otto Harrassowitz.
FUCHS, D. R.
1937 Übereinstimmungen in der Syntax der finnisch-ugrischen und türkischen Sprachen. *Finnisch-ugrischen Forschungen* 24. Société de la Finno-Ougrienne: 292–322.
GREENBAUM, Sidney and Randolph QUIRK
1973 *A University Grammar of English.* London: Longmans.
GREENBERG, Joseph H.
1963 Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In J. H. Greenberg (ed.), *Universals of Language,* The M. I. T. Press: 73–114.
GULYA, János
1966 *Eastern Ostyak Chrestomaty.* Uralic and Altaic Series Vol. 51. Bloomington: Indiana University.
HAJDU, Peter (ed.)
1975 *Suomalais-ugrilaiset.* Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

HAKULINEN, Lauri.
1968 *Suomen Kielen Rakenne ja Kehitys* (3rd ed.). Helsinki.
HIRT, H.
1934 *Handbuch des Urgermanisch.* III Teil: Syntax. Heiderberg.
ITKONEN, Erkki
1944 Der lappische Dual. *Finnisch-ugrische Forschungen* 28: 236–243.
1966a *Suomalis-ugrilaisen kielen- ja historiantutkimuksen alalta.* Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
1966b *Kieli ja sen tutkimus.* Helsinki.
ITKONEN, Terho
1966 Tutkimus suomen asyndetonista. *Virittäjä 1966*: 402–423.
JANHUNEN, Juha
1977 *Samojedischer Wortschatz: gemeinsamojedische Etymologien.* Castrenianumin Toimitteita 17, Société Finno-Ougrienne.
KÁLMÁN Bela
1965 *Vogul Chrestomathy.* Uralic and Altaic Series Vol. 46. Bloomington: Indiana University.
1976 *Wogulische Texte mit einem Glossar.* Budapest.
KANNISTO, Artturi
1951 *Wogulische Volksdichtung.* MSFOu 101.
KARELSON, R.
1958 Soome-ugri Keelte Lausestruktuurist Seoses Konjunktsioonidega. *Emakeele Seltsi Aastaraamat* 4: 195–211.
KARJALAINEN, K. F.
1948 *Ostjakische Wörterbuch* I–II. Société Finno-Ougrienne.
1964 *Grammatikalische Aufzeichnung aus ostjakische Mundarten.* MSFOu 128.
KETTUEN, Lauri
1943 *Vepsän murteiden lauseopillinen tutkimus.* MSFOu 86.
1971 *Eestin kielen oppikirja.* Porvoo-Helsinki.
LAKÓ, György (ed.)
1971 *A magyar szókészlet finnugor elemei. Etimológiai szótar* II. Akadémiai Kiadó.
LAKOFF, G. and S. PETERS
1969 Phrasal conjunction and symmetric predicates. In Reibel and Schane (eds.), *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar.* Engelwood Cliffs, N. J.: Prentice Hall: 113–42.
LEHTISALO, T.
1947 *Juraksamojedische Volksdichtung.* MSFOu 90.
LEWY, Ernst
1911 *Zur finnisch-ugrischen Wort- und Satzverbindung.* Göttingen.
1922 *Tscheremissische Grammatik: Darstellung einer wiesentscheremissischen Mundart.* Leipzig.
LIIMOLA, Matti
1955–6 *Zur Wogulischen Formenlehre.* MSFOu 58.
1963 *Zur historischen Formenlehre des wogulischen I: Flexion der Nomina.* MSFOu 127.
LYTKIN, G. S.
1882 Syrjänische Sprachproben. *JSFOu* 10: 18–100.
MIHKLA, K. ja Aavo VALMIS
1979 *Eesti keele süntaks: kõrgkoolidele.* Tallinn.
MUNKACSI, Bernat
1896 *A votyák Szótára.* Budapest.
NSS = *Nykysuomen Sanakirja* I–VI
1951–61 Porvoo-Helsinki.

OINAS, Felix
1961 *The development of some postpositional cases in Balto-Finnic Languages.* MSFOu 123.
PAASONEN, H.
1939 *Tscheremissische Texte.* MSFOu 78.
1941 *Mordwinische Volksdichtung* III. MSFOu 84.
1953 *Mordwinische Chrestomathie mit Glossar und grammatikalischem Abriss* (zweite Auflage). Société Finno-Ougrienne.
PATKANOV, V.
1911 *Laut- und Formenlehre der süd-ostjakischen Dialekte.* Bearbeitet von D. R. Fuchs. Budapest.
PAUL, Herman
1960(1920) *Prinzipien der Sprachgeschichte* (5. Auflage) Halle: Niemeyer.
パウル・ヘルマン
1976 『言語史原理』上，下．福本喜之助訳　講談社。
PENTTILÄ, Aarni
1924 Zur erklärung des syrjänischen ausdrucks: tśoja voka 'schwester und bruder'. *Kielija kansatietteellisia tutkielmia*, MSFOu 52: 191–195.
PULKKINEN, Paavo
1966a Orallakin ongellakin. *Virittäjä* 1966: 29–36.
1966b *Asyndeettinen Rinnastus Suomen Kielessä.* Suomalaisen Kirjallisuuden Toimituksia. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
1966c Itämerensuomalaisten kielten koordinaatiosta. *Virittäjä* 1966: 333–338.
RAMSTEDT, G. J.
1902 *Bergtscheremissische Sprachstudien.* MSFOu 17.
RAUSMAA Pirkko-Liisa (ed.)
1972 *Suomalaiset kansansadut: Ihmesadut* 1. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
RAVILA, Paavo
1941 Über die Verbindung der Numeruszeichen in den uralischen Sprachen. *Finnisch-ugrische Forschungen* 27: 1–137.
1943 Uralilaisten kielten alkuperäisestä rakenteesta. *Virittäjä* 1943: 247–263.
1960 Sentence Structure. in B. Collinder's *Comparative Grammer of the Uralic Languages.* Stockholm: 247–251.
RÉDEI, Karoly
1965 *Northern Ostyak Chrestomathy.* Uralic and Altaic Series 47. Bloomington: Indiana University.
ROMBANDEJEVA, Je. I. (Ромбандеева, Е. И.)
1954 *Русско-мансийский словарь.* Ленинград.
1979 *Синтаксис мансийского (вогульского) языка.* Москва.
SAMMALLAHTI, Pekka
1972 *Saamen kielen oppikirja.* Helsinki.
1974 *Material From Forest Nenets.* Castrenianumin Toimitteita 2. Société Finno-Ougrienne.
SCHLACHTER, Wolfgang
1973 Syntaktische Beiträge zur Gesichte der finnisch-ugrischen Konjunktionen. *Finnisch-ugrische Forschungen* 40: 202–213.
SEBESTYÉN, Irene.
1958 Das selkupische(ostyak-samojedische) denominale Ableitungs-suffix 1.: l' *Ural-altaische Jahrbücher* 30. Bd. Otto Harrassowitz: 8–22.
STEINITZ, Wolfgang
1975 *Ostjakische Volksdichtung und Erzählung aus zwei Dialekten.* Bd. 1., Budapest: Akadémiai Kiadó.
1976 *Ostjakische Volksdichtung und Erzählung aus zwei Dialekten.* Bn. 2., Budapest: Akadémiai Kiadó.
1980 *Dialektologisches und etymologisches Wörterbuch der ostjakischen Sprachen.* 10. Lieferung. Berlin: Akademie Verlag.

SZABÓ, Laszló
1967 *Selkup texts with phonetic introduction and vocabulary.* Uralic and Altaic Series, Vol. 75. Bloomington: Indiana University.

SZINNYEI, J.
1950 *Unkarin kielioppi.* Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

TAULI, Valter
1966 *Structural Tendencies in Uralic Languages.* Uralic and Altaic Series, Vol. 17. Bloomington: Indiana University.

TERESHCHENKO, N. M. (Терещенко, Н. М.)
1973 *Синтаксис самодийских языов.* Ленинград.

UOTILA, T. E.
1938 *Syrjänische Chrestomathine mit Grammatikalischem Abriss und Etymologischem Wörterverzeichnis.* Société Finno-Ougrienne.

VIRTARANTA, Pertti
1967 *Lähisukukielten lukemisto.* Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

WEINGARD-TERAVAINEN, Joan
1981 Ja, ynnä, and sekä. *Congressus Quintus Internationalis Fenno-ugristarum Pars* VI: 482–486. Turku.

WICHMANN, Yrjö
1893 Wotjakische Sprachproben I: Lieder, Gebete und Zaubersprüche. *JSFO* 11: 1–200.
1901 Wotjakische Sprachproben II: Sprichwörter, Rätsel. Märchen, Sagen und Erzählungen. *JSFOu* 19: 1–200.
1954 *Wotjakische Chrestomathie mit Glossar. Zweite, ergänzte Auflage.* Société Finno-Ougrienne.
1978 *Tscheremissische Sätze.* MSFOu 163.

WIEDEMANN, F. J.
1847 *Versuch einer Grammatik der Tscheremissischen Sprache nach dem in der Evangelienübersetzung von* **1921** *gebrauchten Dialekte.* Reval.
1865 *Grammatik der Ersa-mordwinischen Sprache nebst einem kleinen mordwinisch-deutschen und deutsch-mordwinwischen Wörterbuch.* Petersuburg.
1875 *Grammatik der Ehstischen Sprache.* Petersburg.
1884 *Grammatik der syrjänishe Sprache.* Petersburg.